
がんばれぼくらのノーカン先生！

あすてか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんばればくらのノーカン先生！

【Nコード】

N8646X

【作者名】

あすてか

【あらすじ】

Arcadia様に投稿しているものと同一作品です。

ふと気がつけば異世界に転移してしまっていた主人公、四季村秋彦が、冒険者育成学園での厳しい迷宮探索の日々や、世界各地を渡り歩いた旅を経て、十年後、学園の教師となったところから物語は始まります。

生粋の変態である屍霊術士の少女や、生粋の変態であるハイエルフ

さんや、生粋の魔界大元帥であるロリババアさんなどに好かれたり押し倒されたり殺されかけたりなどしつつ、自分が担当する冒険者パーティを育成していくお話、らしいです。

すでにステータスが限界まで上昇しているのでめちゃくちゃ強い主人公。

お話はたまにヒヤッハー！ します。 詳細は読んでみてのお楽しみ。

たまに主人公の過去のお話などに飛んでいきます。

そっちのお話の語り手は基本的に、主人公の師匠にして隠れヒロインの暴力系ツンドラ女です。

〈ノーカン先生〉

暖かくて柔らかな日差し。

優しく流れる、心地のいい風。

背中を包み込むような草の絨毯。

学園都市リノティアは、今日も平和だ。

「あ、せんせ、ボールそっち行くからあぶねーよ」
「ぶくおっ」

顔面！ 顔面に衝撃！

木陰に寝転んで優雅に昼寝としゃれ込んでいた俺の顔面を、遠くのほうから飛んできたボールが襲ったのだ。

当然、俺は飛び起きて、向こうのほうに突っ立っているガキどもに対して叫んだ。

「くおら、このクソガキどもっ！ どこ見てボール蹴ってんだッ！」

「うわっ怒ったよノーカン先生が」

「ばか、怒るだろあれは普通」

「逃げよう逃げよう」

「えー、俺のボールどうすんだよ」

「そんなの放つとけ、ほら逃げるぞっ」

五人の生徒が俺に背を向けて走っていく。

……しょうがねえな。

俺は足元に転がっていたボールを思いきり蹴り飛ばした。

綺麗な放物線を描いて宙を飛ぶ球体。それは俺の狙い通り、ガキどもの頭上を通り過ぎて、その目前に落ちていった。

彼らは振り返って俺を見た。

「先生……？」

「これからは気をつけて遊べよ。ていうか俺も混ぜろ」

昼寝も飽きたところだったのさ。そろそろ体を動かさなくちゃな。

俺はガキどものほうへと歩いていく。

彼らはちよつと迷ったようだったが……すぐに全員一致で迎え入れてくれた。

この学園の校庭はやはりアホのように広い。好きなだけボール遊びを楽しめた。

これでも昔はサッカー選手に憧れて練習してたんだぜ。地区予選の準決勝で大活躍できるくらいには熟達さ。いやいや、十数年ぶりにボールに触ってみたが、俺の脚もまだまだ捨てたもんじゃないな。もっともこつちではサッカーじゃなくてダッティンとかなんとかなうらしいけどな、この遊びは。まあ基本は変わらんさ。青空の下で球ころを追いかけるっていう基本はな。

俺が前人未到の美しいオーバーヘッドシュートを決めて、敵チームのゴールにボールを叩き込んだとき、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

「お、そろそろつぎの授業が始まるな」

「えー、いいじゃん先生、もうちよつとやろうぜー」

「あと五分くらい大丈夫でしょー」

「ばーか。俺はおまえらとちがつて忙しいし、おまえらも授業の用意があるだろうが」

と言つて、近くにいた緑髪の少年の頭を撫でてやる。こいつの年齢は十四歳くらいだろう。周りの仲間たちもそんなもんだ。耳が尖ってるって部分も含めてな。あ、ひとりは人間族みたいだ。エルフのチームに人間が混ざっているというのは珍しいかもしれない。

「ほら、さつさと行け。遅れたら怒るぞ」

「んー、じゃあそうするよ。でもさ、せんせ、次はあの曲芸みたいなシュート、ぜったい止めてやるかな」

「うはははは馬鹿め、気賀島ヘラクレスバトラーズの得点王と呼ばれたこの俺さまのオーバーヘッドシュートが、そう簡単に止められてたまるか」

「キガジマ……？ なにそれ」

それがあまりにも耳慣れない単語だったのか、きよんとした表

情を浮かべる、エルフの少年。

……ああ、悪いな。俺もびっくりしてる。もう思い出すことも少なくなってるんだが。

「俺の故郷の名前さ。さあ、もう本当に行け」

「わかったー」

「んじゃね、ノーカン先生！」

「ノーカン言うな！ クソガキども！」

まったくガキというのは気安くて遠慮というものを知らない。

馴れ馴れしくてうるさいもんだ。

だから俺は、子供のことが好きなのさ。

ムンドウースと呼ばれるこの世界の地図の中心に、ギアラという大陸がある。

学園都市リノティアは、ギアラ大陸の南西に位置する大国エルイストアートの、その王都からはやや離れたところに建造された、この世界でも有数の超巨大教育施設だ。

生徒数は二十万人だったか、三十万人だったか。敷地面積はどれくらいだろう？ 学園都市というだけはあって、とにかく広い。東京ドームで数えるの馬鹿らしくなるくらいには広大だ。そしておよそこの世にあるもののほとんどはここにある。敷地内には学生寮もあればパン屋から本屋、武器屋から、凶悪な魔物が出現するダンジョンまで、なんでもござれ。

で、この教育施設がなんのつもりで造られて、そしてここでなにを教えるのかっていうと、それには色んな答えがある。たとえば剣を振る戦いかただったり、魔法を使う方法だったり、薬草や鉱物の知識、歴史、うまい商売のやりかた……これまたなんでもござれ。

だがまあ、つまるところを言えというなら、それはたったひとつだろう。

生徒たちを強く鍛えて、優秀な冒険者として外界に送り出す。それがこの学園都市で、そして全世界の同様の施設でも行なわれている。

人間族、獣人族、エルフ、ドワーフ、ノーム、竜人族、悪魔族、天使族……多種多様な種族の子供たちがここに集められて、最新の教育をたっぷりと受けたあとで、外の世界に旅立っていくわけだ。なんでもこの世界には魔王という強大な存在……世界中の魔物どもの親玉がいて、人間や亜人の連合軍は、そいつを倒すためにちよつとでも戦力を増やしたいらしい。意外と重要なのだ、この施設は。

で、俺はというと、この学園都市に数え切れないほど所属している教師のひとり。

天然パーマのせいでたつぷりとクセのある髪は茶色っぽい。身長はだいたい百八十センチくらい。顔立ちが渋みのあるナイスガイといたいところだが、まあ、普通なんじゃないのか。自分のことはよく分らん。けつこう鍛えているつもりだから全身にたつぷりと筋肉がついている。着ているものは、白いシャツと黒いズボン、そしてその上から羽織った灰色のロングコート。容姿については、こんなところか。

この学園での肩書きは、用務員、兼、迷宮探索実技担当教官、兼、非常事態解決専門特別臨時教師。

四季村秋彦。それが、俺の名前だ。

なんとも純和風な名前だろう。この中世ヨーロッパっぽい雰囲気の世界では、どうしたって浮きまくる名前さ。まあそれも当然だ。俺はもともとこの世界の住人ってわけではないんでね。

あれは、そう、十年前……西暦二〇〇八年のことだったか。当時、普通の高校生だった俺は、その日もまたごく普通に学校に通って、普通に授業を終えて、普通に帰宅して、普通に家族と団欒して、普通に風呂に入って、そして普通に寝て、普通に起きるはずだったのだが、最後のところでどうやらなにかを間違っただけらしい。

目覚めてみれば、そこはすでに異世界だった。

大変だったのはそこからだ。なんの後ろ盾も金銭もなかった俺だが、ちよつとした幸運が重なってこの学園に入学することが許された。ダンジョン探索と猛勉強、自己鍛錬に明け暮れる毎日が始まった。仲間たちとパーティを組み、ダンジョンの地下の奥深くにまで潜り込み、凶悪な魔物たちと戦い、一度か二度は世界の危機っぽいものを防いで、気付いてみれば学園を卒業していた。で、ほかにやることもないからこの学園の教師として活動している。

考えてみれば、俺がこの世界にやってきてから十年も経つのか。時間が流れるのは、早いな。

俺も、もう二十七歳。もうちよつとおっさんだ。……まだ、お兄さんだ。

「二十七歳は立派なおっさんの領域だと思いますけど、先生？」

「いきなり背後から声をかけるのは感心しないな、ルーティくん。それと他人の心を勝手に読むのはやめなさいといつも言っているだろっ」

硬くて冷たい声の主のほうへと振り返る。

最初に断言しておくが、この少女、真正のサディスティンである。小柄な少女だった。人間族。かなりの美少女だと思う。艶やかな黒髪を肩にかかるあたりで綺麗に切りそろえている。いつもながら出ているところも引つ込んでいるところもないスレンダーな肢体。やたらと長くて細くて白い脚。すっきりとした鼻筋と、よく薄ら笑いを浮かべている唇の持ち主。切れ長の瞳とフレームレスの眼鏡という組み合わせが、この少女の風貌の知的さを強めている。着用しているのはこの学園の制服。白を基調としていて、デザインは洗練されていた。

この少女の名を、ルーティ・エルディナマータという。

ちなみにこの学園の高等部一年生でもある。

「性癖とプロフィールを紹介する順序が逆ではありませんか？」

「いやだから他人の心は読んじやいけませんって。ていうか性癖については弁解とかしないのね」

「はい。事実ですから」

にんまりと浮かぶ、暗い笑み。

「うわー、背中にゾゾゾって悪寒が。」

「で、ルーティくん。この俺になんの用事かな」

「マスター・ゾルディアスが、あなたにお話したいことがあると」

「……先生が？ ああ、分かった。いつものところか？」

「はい。できるだけお急ぎくださるようにとのお達しです」

「ほいほい。すぐ行くわ」

ルーティに軽く手を振って、俺は歩き出した。

正直、ほかのくだらん用事なら、無視してしまうのも有りだったんだが。あの先生に関わる用事だというなら、そういうわけにはいかんだろう。

十分ほどかけて、俺は目的の場所へと到着した。

校舎の隅っこのほうで俺を待ち受けていたのは、木製の頑丈そうな扉。そこを飾る金属製のプレートにはこう記されていた。

《屍霊術学科資料室》

そしてその下にもうひとつあるプレートには、

《第三職員室》

と、ある。

屍霊術。ネクロマンシーともいう。それを使う連中のことを、屍霊術士とか、ネクロマンサーという。

剣術、槍術、薬草学から錬金術まで、この学園はありとあらゆる学問の教師を招き入れているので、当然、屍霊術を専門に教える教師も在籍しているし、それを学ぶ生徒もいる。まあ、屍霊術っていうのは、死体やら悪霊やらを操る術のことだ。多くの地域では外道と呼ばれて蔑まれてる一派でもあることだし、好かれていない。授業を受けている生徒の数は、すべての学問のなかでいつもワーストのトップを争っている。

で、そんな屍霊術を教える唯一の顧問教師が、この扉の向こうにいるわけだ。

ここは通称、魔の第三職員室。呼び出されて帰ってきた者はいないという、リノティア学園一〇八不思議のうちのひとつたる暗黒スポット……！

いや俺はしょっちゅう呼び出されてるんだけどね。噂というのはあてにならないものなんだなあ。

ま、生徒たちが無気味に思うのも仕方はない。屍霊術という暗くおぞましい学問の資料を集めている場所だということに加えて、追いやられるようにしてこんな校舎の端っこにあるというのも、怪談として仕立て上げるにはうってつけといったところだろう。さらにもうひとつ、この職員室を使っている教師がただひとりだということも奇妙ではあるはずだ。この学園は広く、生徒の数は膨大だ。となるとそれに対して教師の数も増やす必要がある。そのため、職員室の総数は三桁にも膨れ上がっていたりする。

が、この職員室に席を置いているのは、たったひとり。実際、占有もいいところだ。

……おっと。考えごとをしている場合じゃなかったな。早く入らないと。

俺は拳の裏で扉を軽くノックした。

「秋彦です」

「開いていますよ、どうぞお入りなさい」

低く、よく通る、落ち着いた声の返事が聞こえた。

扉を開けて、入室。

「失礼します」

後ろ手で扉を閉じる。

入ったとたんに、左右を大きな本棚で挟まれる。

資料室の内部は、そんなに広くはない。というかけっこう狭い。

もともと十五畳ほどの面積だったのだが、いろいろな本やらそれを置くための本棚やら、薬品やらマジックアイテムやらを詰め込んであるうちに、こんなことになってしまったのだという。とはいえ主人が綺麗好きなおかげで薄汚れていたりはしない。むしろさっぱり

としていて小奇麗だ。

本棚の廊下が正面の奥まで伸びていて、いろいろな資料を見て回るためには、まずそこまで進まなければならぬ。

で、その、俺から見て正面の奥に、マーキアス・グラン・ゾルデアイアスという男はいた。座り心地のよさそうな椅子に深く腰掛けていて、大きな机の上に何枚もの書類を広げている。手にはペン。どうやら事務仕事の最中だったようだ。

彼の年齢は、外見だけで判断するなら、二十代の後半から三十代の前半といったところだろう。もっとも俺が初めて出会った十年前から容貌が変化していないが。長い髪は腰まで届くほど長く、その色は闇よりも暗い。顔立ちも伶俐。しかも整いすぎているほど整っていて、そのせいか酷薄で非人間的な印象さえ受ける。死魚のそれのように濁った瞳はいつさいの明かりを宿していないが、その深みのある黒からは底知れない知性を感じられる。身長は俺よりも高い。俺もけっこう背丈はあるんだが、マーキアス先生はたぶん百九十七センチはあるだろう。かといってひよる長いわけではなく、体つきはけっこうがっしりとしている。真っ白なシャツと黒いズボンを着こなしていて、その上から漆黒の上着を着用していた。きつちりと身だしなみを整えているのはいつものことだ。

マーキアス先生は俺のほうを見てにっこりとほほ笑むと、ペンを置いた。

「やあ、アキヒコ。よく来てくれましたね。いつもいきなり呼び出して申しわけありません」

「気にしないでください。先生のためならいつでも時間を作りますよ」

「そう言っていただけだと助かります」

先生は少しだけ嬉しそうに言って、それから、自分の使っている机の前に置いてある、ほぼ俺専用と化している椅子を勧めてくれた。そこに座りながら、俺は尋ねた。

「で、どうしたんですか？」

「生徒がひとり、行方不明になりました」

……やっぱり、か。

まあ、なんとなくそんなことだろうという予感はしていた。俺がここに呼ばれるのは、だいたいそういう、厄介な事件があったときだからな。

「どこで、ですか？ 生徒の詳細は？」

「生徒の名前はウィルス・ルーモニア。高等部の一年生で、レベル七十三の錬金術師。《イゾルデ大迷宮》の地下三十五階で仲間たちからはぐれてそれっきり、だそうです」

「……イゾルデにレベル七十三のひよつこが？ そりゃあ無茶つてもんでしよう。監視員はなにをやったんですか」

この学園にいくつか置かれていた大転移装置からは、大陸の各地に点在しているダンジョンへと瞬時に移動できる。《イゾルデ大迷宮》というのは、なかでも極悪な難易度だということでは知られている。レベルが最低でも一〇〇を越えていないと、地下一階をうるついている魔物どもですら死神に見えるだろう。

で、あまりにも場違いなほどレベルの低い連中が高難易度ダンジョンに挑むのを防ぐために、すべてのダンジョンの入り口にはいつも監視員がいて、身のほど知らずの無謀な連中を通さないようにしている。はずなんだが。

先生はため息をついて、言った。

「最近、一部の生徒たちのあいだに出回っているアイテムがありません。レベルの解析をごまかせる効果を持つのだそうです」

「あー……、つたく、自業自得だな、馬鹿が」

そこまでして上級のダンジョンに挑みたかった理由は、まあ、察しがつく。いまの自分では手が届かないほど希少価値の高いアイテムが欲しかったとか、強い敵と戦いたかったとか、周りの仲間たちに見栄を張りたかったから、だとか。なんにしてもくだらないことだ。

だからといって見捨てるわけにはいかんだろうな。なにせ、生徒

だ。

普通ならこんなことにはならないがね。危険な魔物が無数にうつくダンジョンを探索するんだから、当然、死の危険性はある。胸糞の悪い話だが、行方不明になった生徒すべてに気を回してはこんな施設は運営できない。生徒の生死はすべて自己責任の結果として扱われるのが、この学園での常識だ。それでも俺が呼ばれたんだから、それなりの理由があるんだろう。ま、そこは詳しく追求しないさ。どうでもいいことだからな。

俺は立ち上がった。

「すぐ行きますよ」

「すみません。あなたには無理ばかりを言ってしまえますね」

「気にしないでくださいって。先生は俺とちがって忙しいんですから、そこで書類を片付けていてくださいよ。ま、こういうのも恩返しだと思えば苦にもなりません」

そう、俺はマーキアス先生に、返しても返しきれないほどの恩義がある。

……この世界にやってきたばかりのころ、俺はひどく荒れていた。そりゃそうだろう。いきなりいままでの人生をなかつたことにされて、右も左も分からないこの世界で、これからずっと生きていけと宣告されたんだ。心は荒むさ、無理もないといまでも思う。

そんな不良人生まっしぐらの俺を、周囲を傷つけてばかりの大馬鹿野郎だったこの俺を、それでも見捨てずに見守ってくれたのが、マーキアス先生だった。先生がいなければ俺はこの世界で希望の光を見失い、暗黒と絶望に屈して二度と立ち上がれないところだっただろう。

いいひとなのさ。とんでもなく。……見かけがものすごく悪そうなのが難点だけだな。ゲームとか漫画とかだと絶対にラスボスになる顔だ。でもいいひとなんだぜ。ラスボス顔だけど。

そして俺がこの仕事を断れないのは、なにも、先生への恩返しっというそれだけが理由ってわけじゃない。

マーキアス先生に背を向けて、言う。

「子供は好きですからね。死ぬところは見たくないし……せめて遺体だけでも見つけてやりたい」

「素晴らしいご意見ですね、先生」

「だからねルーティくん、他人の背中からいきなり声をかけるのはやめなさい」

びっくりするからさあ。

テレポートの魔法なんて使えたって、きみ？

「単なる隠密機動術の初歩ですよ、先生」

「はっはっは。そうかいそうかい。で、俺はこれから緊急の用事があるんだがね」

「はい。分かっています」

「……その手を離しなさい。前に進めないでしょうが」

ルーティは俺のコートを掴んでいるのだった。よしなさい、ただでさえヨレヨレなのに。独身の男にとってはね、衣服にいちいちアイロンかけるのも面倒くさいですよ。

半身だけ振り返って、ルーティを見る。

少女は、とんでもないことを言った。

「私も連れて行ってくださいますか？」

「はあ？ 駄目だよ駄目。いちおう訊いておくけど、おまえのレベルはいくつだった？」

「一七〇です」

「邪魔だ。ここにいろ」

俺はできるだけ冷たく聞こえるように言い放った。

《イゾルデ大迷宮》への挑戦権利が与えられる最低レベルは一五〇だ。その点でいえばルーティは合格しているといってもいいだろう。

だが、問題の生徒が行方不明になったというのは、地下三十五階もの奥深くだ。そこで生き残るために必要となるレベルは二〇〇を軽く越える。明らかに、ルーティでは力不足だ。

というわけで、俺はルーティの手をコートからやんわりと引き剥がした。

……だが。

「アキヒコ。私からもお願いします。ルーティを同行させてやってはもらえませんか」

「……先生？ 本気ですか？」

「ええ。ちよつどその子にも新たな試練が必要だと思っていたところです。心配ならば無用ですよ。なにせ私にとっていままででもっとも優秀な弟子ですからね。才能は保障します。あとはそれを磨く苦難を与えるだけです」

やれやれ……先生の趣味にも困ったものだ。

このひと、自分があまりにも完璧に完成しているからって、我欲というものがまるでない。その代わりといってはなんだが、弟子を育成するということにかけて普通ではないほどの労力を注ぐのだ。俺も昔はよく鍛えてもらったものさ。もっとも、ろくな成果は出なかったのだが。

先生の頼みごとだととなると、断るわけにはいかなかった。生徒の安否も気になることだし、ここでああだこうだと口喧嘩している場合じゃないな。

俺は盛大なため息をつきながら言った。

「分かりましたよ、先生。……ルーティ、自分の身は自分で守れよ？」

「もちろんです。ありがとうございます、先生。マスター・ゾルデイアスモ」

ルーティは俺に対して笑みを浮かべ、振り返ってマーキアス先生に対して頭を下げた。

ルーティとマーキアス先生の関係は、ただの生徒と教師というだけではない。このふたり、個人的な師弟の間柄でもあるのだ。

すなわち、このサディステインが専門とする職業は

「屍霊術士、ルーティ・エルディナマータ。偉大なるマスター・ゾ

ルディアスの名に恥じぬ働きをご覧に入れると、ここに確約いたします」

そう言つて、ルーティはスカートの裾を両手でちよんと摘み上げ、優雅に一礼してみせた。

……やれやれ、これは、どうも。

楽しいことになりそうだね。まったく。

さて、行方不明になつた生徒を救出することになつたわけだが、まずは情報収集することが大事だろうな。

そう思つて先生から問題の生徒のパーティメンバーと担当官の名前、所在を教えてもらい、彼らに話を聞くことにした。

結果は、まずまずといったところだ。

ウィルス・ルーモニア。獣人族。性別は男。高等部一年生、十六歳。主専攻学科は錬金術。レベル七十三。中堅クラスのパーティ、《蒼き竜巻》のメンバー。と、プロフィールはこんなところだろう。容姿についても写真をもらったからちゃんと分かる。性格は、よく言えば大人しくて、悪く言えば臆病だつたそうだ。

そんなウィルス少年がなぜパーティのほかのメンバーとはぐれてしまったのかという点についてだが、これは誰にもよく分からないらしい。気がついたらいなくなつていたのだそうだ。

ほかのメンバーは慌ててウィルス少年を探したのだが、どうしても見つからない。そのうち彼ら自身のほうも危ないことになつた。ウィルス少年以外は平均してレベルが一五〇以上あつたのだが、そこはすでに地下三十五階の奥深くだ。魔物どもは凶悪さを増している。できるだけ戦闘を避けていたとはいえ消耗は激しく、ときおり姿を現す強敵に対しては逃げるだけで精一杯。命の危険を感じた彼らは、はぐれた仲間を見捨てるかたちとなつて地上に帰還したのだつた。

なぜレベルを偽つてまで少年が《イゾルデ大迷宮》に踏み入つた

かについては、《蒼き竜巻》のリーダーだというドワーフの少年が教えてくれた。

なんでも、彼は日ごろから、自分だけがレベルが低く、パーティのお荷物のような存在となっていることに対して、ひどい劣等感を抱えていたのだという。

かといつていまさらほかのパーティに迎え入れてもらおうにも、彼は彼自身の激しく人見知りする性格により、あきらめるしかなかったのだそうだ。

そういうわけで、勇気を出して難易度の高いダンジョンに挑み、おのれを鍛えようとしたわけだ。

それがいけないとは言わないが……無謀だよ、少年。
気持ちは分かるけどな。

《蒼き竜巻》のメンバーたちの表情や雰囲気は、ウィルス少年をイゾルデに連れて行き、そして見捨てて逃げてしまったことへの悔恨と、彼が行方不明となることを防げなかった自分たちに対する怒りとが、混濁として浮かび上がっていた。

いい仲間に恵まれたな、少年。

そいつにもつときちんと気づくことができている、おまえはいや、遅くないさ。まだ遅くない。

遅くないようにするために、俺はこれからおまえのところに行くんだよ。

学園の隅つこのほう、《イゾルデ大迷宮》への転移装置がある建物へと、俺たちはやってきた。外壁も内壁も真っ白で大きなドーム状の建造物だ。内部にあるのは転移装置のみ。周囲にはいくつかつたく同じ建造物が並んでいる。

俺は、横に立つルーティに向かって言った。

「準備はいいかな、ルーティくん」

「はい、先生。いつでも大丈夫です」

そう答えたルーティは、さっきまでとは服装が違っていた。というか、やっぱり制服を着てはいるのだが、その上から真っ黒いロー

ブを身にまとっているのだ。闇色でありながら輝くような、上等そうなやつだった。フードは被らずに背中の中ほどと垂らしている。手には、金属製の丈夫そうな杖。長さ二メートルつてところか。

これが、ルーティ・エルディナマータの戦闘衣装だ。

それに対しての俺はというと、まったくいつも通りのシャツとズボン、それにコート。

これからダンジョンに潜るとは思えないぐらいの軽装だろう。俺もそう感じる。

昔は甲冑やら兜やら着込んでいたんだがなあ……いまでは、ああいうのを着けると、どうも重くて、思うように身動きが取れなくなってきたんだよなあ。体力の衰えを実感するよ。ていうかお兄さんはそろそろおっさんなんだから、全盛期なんてとっくの昔に終えちゃってる身の上なのである。それでもまあ、かわいい生徒のためとはいえ体に鞭打って危険に飛び込む、そんな自分の生きざまに惚れる。

「おっさんの自画自賛ほどキモいものはない　モイ・キートン」

「だまらっしゃい。おっさんではありません、お兄さんです。あと勝手に詩人を創作してはいけません」

ていうかね、きみはなんで俺の考えが読めるのだね？

読心魔法でも習得しているの？

「先生のお考えは単純ですから。雰囲気で分かります」

「……あ、そう。……んじゃ行くよ、ルーティくん」

「はい。お供させていただきます。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします」

ペこりと俺に頭を下げる、ルーティ。

そうするとなんだかわいらしいほど俺に懐いてくれている生徒のようなのだが、この生徒、隙あらば俺の痛いところを突いてくるわ寝首を吹き飛ばそうとするわ、たいへんな下克上フリーダムっぷりを発揮するので、まったく安心できない。

ま、いつまでもこのサディステインのことを気にして背後にビク

ビクしていても仕方がない。

俺は前に進み、正面の巨大な球体に右手をかざした。

球体は光り輝いていた。紫色の小さな太陽だ。小さな、とはいっても、本物の太陽と比べての話だ。こいつの実際の直径は五メートルほどもある。これがダンジョンへと俺たちを飛ばしてくれる空間転移装置だ。遠く離れた場所へと瞬間移動させる必要があるので、自然とそれ相応のエネルギーを扱う必要がある。よって、こういった巨大さになってしまったらしい。ダンジョンに多く置いてあるやつはもつと小型だ。最低でダンジョンの一階分、多くても数十階分くらいの、縦の瞬間移動でいいからな。

「開け」

短く告げる。

それがこの転移装置を扱うためのキーワード。

その瞬間、装置が大きく膨張し、紫の光が俺とルーティを包んだ。視界がすべて、荒れ狂う紫の奔流によって埋め尽くされる。

で、つぎに目に映ったまともな風景は、すでにほんの五秒前までとは一変していた。

周囲はすべて硬く分厚い、湿気を帯びた岩肌で囲まれている。

ここはすでに、広大なダンジョンの一部だ。

《イゾルデ大迷宮》。ここはかつて、人間の国を侵略する魔物どもの前線基地として機能していたらしい。司令官たる魔界の貴族が倒されてから千年が経ち、一度は放棄されたこの場所に、百年前から再び魔物たちが住み着くようになってたらしい。

かなり暗いが、それでもなんとか視界を確保できるのは、岩盤のいろんなところに生えている苔のせいだろう。不思議なことに、その苔は淡く光っていて、この地下における唯一の光源となっていた。……ここも、変わらんなあ。

初めて足を踏み入れたのは、九年……いや、八年前だったか？

あのときは大変だったな。ユーフィーナのやつがなにを思ったのか勝手に暴走して大暴れ。あやうく俺やウィルダネスまで巻き込まれ

て死ぬところだった。冷静な顔をしながら下半身がずっぱり地面に埋まってるやつまでいたし。

卒業してからも何度かここに来る機会があったが……ここというより、ダンジョンってやつはまったく、どれだけ年月が経とうとも変わり映えがしない。

俺のほうは、いろいろと変わっちまったっぽいというのにな。

と、昔の思い出なんかに浸っている場合じゃなかったか。

先に進もうとして一步を踏み出すと、ルーティから声をかけられた。

「先生。ウイルス・ルーモニアが消息を絶つたのは、地下三十五階でしたよね？」

「ん、そうだな」

「ならばこの転移装置で直行すればよいのでは？ 教員用の機能があるのでしょうか？」

ふむ、さすがによく知っているな。

ルーティの言葉の通り、ダンジョンの各フロアごとにひとつずつ置かれた小型転移装置は、それぞれ密接にリンクしていて、理論上そのうちのひとつさえ見つければ、あとはそのダンジョンの内部ならばどこにでもいける。

ただしそれはあくまでも理論上の話だ。普段は意図的にロックされていて、生徒たちが使えるようにはなっていない。

仮にそんな機能を生徒たちに使わせようものなら、いろいろとまずいことが起こるからな。その理由はだいたい大きく分けてふたつある。

周知のことだが、ダンジョンっていうのは、基本的に、地下に潜れば潜るほど敵が手ごわくなっていく。一階では楽勝だった戦いが、二十階や三十階も下れば命がけのものになる……なんてことは当たり前なのだ。つまり、いい気になって慢心した未熟者が一気に最下層まで降りてしまつて自滅するという事態を防ぐ必要がある。これが理由のひとつめ。

ふたつめは、学園は生徒たちを優秀な冒険者へと育て上げたいわけであって、成果ばかりを楽しんで求める軟弱者を抱えるつもりはない、ということだ。エレベーターやエスカレーターばかり使っただけじゃありません、階段を使って足腰を鍛えなさい、というわけだな。実際、転移装置での移動に慣れきってしまったやつらなど、外の世界ではどれほどの役にも立たないだろう。

ま、そんなわけで、小型転移装置は、学園への帰還という機能しか使えないようになってるのだ。生徒に限ってはね。俺たち教師はちがうぜ。いままさにこういう場合のような、緊急事態があるからな。機能のロックを解除する方法を与えられているのさ。

もちろん、俺は、行こうと思えばすぐにも三十五階まで降りられるわけだが……。

「いや、歩いて地道に行くよ」

「なぜですか？」

「んー、それはだな、ウィルス少年がそのフロアから移動しているかもしれないだろ？ まさか下に降りてるなんてことはないだろうが、意外と幸運に恵まれて十階あたりまで上がってきているかもしれない。ていうかむしろ生きているならその方向の可能性のほうが高いかもな。経験上、道に迷ったやつがジツとして動いてないってのはまずありえない。その可能性を考慮して、この一階から風潰しに探してみる」

歩きながら、話す。

ルーティは素直についてきてくれている。

「ですが、それでは時間がかかりすぎるのでは？」

「……まあな。だから急ぐよ、全力でな」

そう言っつて、俺は、コートの内側から自分の武器を取り出した。

無骨な、鉄材と木材の結集体。

長さ六十センチほどの、歪な棒状の代物。

銃だ。火縄銃を想像してみてもほしい。その半ばほどに巨大な回転式の弾倉を無理やりくっつけてあって、不恰好が極まったような、

なんとも情けない外見だ。

が、性能はこの俺がきつちりと太鼓判を押してやれる。

キンロツホレヴン社製六連発式魔導銃、ディアハザード。

この俺の、いまの、相棒だ。

俺は銃口をおもむろに前方へと向けた。

二十メートルほど向こうからこちらに走ってくる人影がみつっ。

そいつらは後ろ足で直立したトカゲのような風貌をしていて、両方の前足にそれぞれ金属製の盾や剣を装備していた。中堅の魔物、リザードマンだ。

リザードマンどもは黄土色の瞳に爬虫類特有の冷たい光を宿し、こつちを餌だと決めつけて襲いかかってくる。その動きは素早い。このダンジョンにうろついている魔物どものなかじゃあ弱いほうだが、それでも戦闘能力は十分に人殺しに特化している。レベルは八十そこそこつてところか。

俺は容赦なく躊躇なく、人差し指で引き金を引いた。

全力で扉を蹴破ったような轟音が、周囲の闇へと鳴り響く。

銃口が火を噴き、それと同時に先頭のリザードマンが後ろに大きく吹っ飛んだ。長い首の上に乗っていた頭部が丸ごと消えてなくなり、脳漿や血をまき散らしながら宙を飛ぶ。

残りの二匹は仲間の死にざまにすら一瞬の動揺も見せなかった。

こいつらにあるのは食欲と性欲だけだ。

俺はまたしてもためらわなかった。

轟音。

片方のリザードマンの腹部に弾丸が命中。そいつは上半身と下半身に分かれて壁にへばりつく。

轟音。

最後のリザードマンは盾を構えて防御しようとしたが、それごと頭を消し飛ばされた。

初戦が、終わった。

硝煙のにおいを嗅ぎながら、俺は弾倉に新たな銃弾を装填した。

この銃の優れている点は、個人の持つ重火器として、俺のもといた世界ではありえないほどの大口径でありながら、片手で容易に扱えて、しかも撃ったときの反動がものすごく小さいところだ。さらにはほとんど磨耗したり故障したりすることがない。さすがは魔法の世界の産物だな。

もともとこいつはドラゴンや巨人族と喧嘩をするために作られたというだけであって、威力は抜群。狙いが少し甘いのが難点だが、そのあたりを使い手の技量で補ってやりさえすれば

頭上に発砲。奇襲をかけてきたりザードマンの股間から脳天までを一発で貫く。

補ってやりさえすれば、こんなもんさ。

俺は歩みを止めなかった。

横幅が五メートルほどの真っ直ぐな道。左右には岩壁。

下へ降りる階段を探し、あたりを注意深く見わたしながら、早足で歩く。

そんな俺の真横の壁が、いきなり木っ端微塵になって砕け散った。岩石のシャワーの向こうから現われたのは、牛頭人身の巨軀。

ミノタウロスか。こいつは迷宮を歩くにあたってもっとも警戒しなければいけない魔物のうちの一匹だったりする。なにせ、強いからな。

身長五メートルはあろうかというミノタウロスは、俺の眼前で、その手に持った斧を振り上げた。

巨大な旋風が唸りを上げる。

触れただけで挽き肉に成り果てる死の一撃を、俺は後ろへと跳ぶことよってなんとかかわした。

……おいおい、ここの一階にミノタウロスなんていたっけか？

しかもこいつ、明らかにレベル二〇〇は越えている。土気色の分厚い肌、はちきれんばかりに膨れ上がった筋肉。鼻息も荒く俺を睨みつけるその双眸には、目の前の適を殺すことしか考えにないという、狂った殺意が宿っていた。

舌打ちしつつ、銃を持ち上げて素早く照準を定める。狙いはもちろんミノタウロスの眉間だ。

発砲。

鉛の飛礫が、俺の意思に従って忠実に、牛頭の急所へと真っ直ぐに飛翔する。

が、俺の耳に聞こえたのは、銃弾が肉を穿つ重い音ではなく、鉄が鉄に弾かれるときの甲高い音だった。

ミノタウロスはその斧の柄を盾のようにして、自分を襲う銃弾を弾き返したのだ。

……器用なことを。

などと、感心している場合じゃなかった。

そのまま俺の頭上へと持ち上がる戦斧、それは俺が銃の引き金を引く前に、俺の脳天へと

ミノタウロスの斧が、ほとんど同型の斧の一撃によって弾かれた。横合いから俺の窮地を救ったのは、こちらも、筋骨隆々としたミノタウロス。ルーティが召喚魔法で呼び出したのだ。

ただしその容貌は異様だった。まず、全身の肌の色が部分によってちがうのだ。紫だったり、肌色だったり、あるいは赤だったりもした。色違いの肌と肌を、太い糸による縫い目がつなぎ合わせている。さらには右半身と左半身で大きさや形が異なっている。右腕のほうがやや長いし、左腕の太さは右腕のその倍もある。背中からは大鷲の翼が生えていて、尻尾はサソリのそれだ。それでも頭は牛のもので、ミノタウロスっぽいのだが、双眸の色は左右でちがっていた。右は燃えるような赤。左は凍るような青。顔面にもそこを半分に分けるようにして痛々しい縫い目が走っている。

ミノタウロスというよりは、キメラ 数多の生物を組み合わせた合成魔獣だな。

そして実際、俺の感じた印象は、正しい。

「我が敵を速やかに葬れ、ドレッツティーナ」

ルーティが静かに告げた。

ドレッツティーナと呼ばれたキメラミノタウロスが、無言で動く。地響きを上げて前へと踏み込む、ドレッツティーナ。斧を振り上げる。当然、敵のミノタウロスも応戦した。上から叩き斬るようなドレッツティーナの斧と、下からすくい上げるようなミノタウロスの一撃が、ぶつかり合って火花を散らす。

ミノタウロスの斧が、砕けて散った。

たたらを踏みながらも、そいつはいまだに戦意を失わず、雄叫びを上げる。

その頭を、ドレッツティーナの右腕が掴んだ。

驚くべきことが起こった。

ミノタウロスの膝が、曲がる。上から押さえ込まれる力に屈して膝が曲がった。ミノタウロスの瞳に、俺から見てもはつきりと分かるほどの驚愕の色が浮かぶ。おそらくはいままで一度たりとも力比べで負けたことなどなかったんだろう。たぶん理性などないはずなのに、それほど驚きだったということか。

ミノタウロスが声を上げた。それだけで地鳴りが起こりそうなほどの大音声。腕が一回りも太くなるほどパワーを上げてドレッツティーナの右腕を掴む。

だがなんの変化も起こらない。

ドレッツティーナは無言。ただ、無慈悲に、機械のように愚直に、ミノタウロスを押さえ込んでいく。

ミノタウロスの脚から骨が砕ける音が聞こえた。そして腰の骨が折れた。断末魔の悲鳴が上がる。それでも押さえ込む力はゆるまない。やがてミノタウロスが悲鳴を上げたがそれでも止まらない。巨躯の胴体が潰れて地面にめり込み血の海が広がっていく。

時間にして一分もかけずにぐしゃぐしゃと潰れきったミノタウロスは、文字通り、原形をとどめていなかった。

ルーティはローブの裾を摘み上げて、俺に一礼してみせる。

「いかがでしょうか、先生。我が屍霊術の働きは」

「……相変わらずネーミングセンスが最悪だよ、ルーティくん。ド

レットティーナはないだろ」

「あら、かわいらしくてよいでしょう？」

ドレットティーナこそは、ルーティの屍霊術のひとつの成果だ。彼女が《屍骸遊戯》という二つ名で呼ばれる理由でもある。

屍霊術は死体を操ることを得意とするが、それはなにも、死体をそのまま操るといっただけではとどまらない。死体を自在に操るといっことは、ただ死体を動かすだけではなく、死体を術者の思い通りの形態へと作り変えるという意味をも持つのだ。たとえば基本となる死体をミノタウロスに決めたとして、そこにグリフオンの死体から翼をもつてきて取り付けたり、大サソリの尻尾をもつてきて取り付けたりと、屍霊術士は好き勝手にやれるというわけだ。

古いもの、壊れたものを捨て去って、新しく強いものへと交換する。劣っている部分を取り除いて、より優れた部分を持つてくる。それを繰り返して、屍霊術士は自分の好みの死体を造り上げるといっうわけだ。もちろん、自分の身を守るための護衛、いわば一種のゴーレムへと仕立て上げるために。まさに死体のパッチワークといったところだな。

俺が知る限りだと、ルーティのゴーレムは全長十メートルはある怪鳥のはずだったんだが……ここしばらく姿を見ないと思っていたら、どうやら新たな作品の製作にご執心だったらしい。ていうかドレットティーナの背中の翼がああ怪鳥のなれの果てか？ ちなみに怪鳥の名前はキャサリンとかいったはずだ。ああ恐ろしいまでに外見と名前がかみあっていない。

ドレットティーナが、ルーティの足元へと、その逞しすぎる手の平を下ろす。

ルーティはそこに乗りながら、俺のほうへと振り返った。

「ねえ、先生」

「んー？」

「邪魔には、ならなかったでしょう？」

勝ち誇ったような、邪悪な笑み。

この娘、やはり、サディステイン。
俺は降参するようにして両手を挙げた。

「ありがとう。助かったよ、ルーティくん」

「うっふふふふっ！ お礼なんていいんですよ、先生！ 当然のことをしたままでですから！」

愉快な高笑いがダンジョンに響く。

……ついてくるなって言ったこと、じつは怒ってたりするのかわずしんずしんと足音を響かせて進むドレッティーナ。その肩に座ったルーティの背中を見送りながら、俺はため息をついた。……今日はよくため息をつく日だ。

ルーティとドレッティーナの活躍は素晴らしかった。

彼女たちの前に敵はいない。バジリスク、サイクロプス、マンテイコア……凶暴で名の知れた魔物どもを瞬く間に葬っていくドレッティーナの怪力には、俺はもう感心するというより呆れるしかなかった。しかもただの馬鹿力だけではなく、対石化能力や対毒能力まで付加してあるとは。念の入ったことだ。もはやあのキメラミノタウロスはちよつとした動く要塞だな。

というわけで、ルーティたちが大暴れしている後ろで、俺は思う存分にダンジョンの調査と行方不明の生徒の搜索を行なえたわけだ。そしてやってきました地下三十五階。

ここまでウィルス少年の影も形もなし。

……まさかとは思うが……いや、けっこう可能性は高いんだが……すでに魔物の餌になっていて胃袋の中身、なんてことはないだろうな。だとするとどうやって探しようがないということになる。

一階からここまで、見落としはなかったはずだ。だから、この階にもいなかったとしたら、もつと下層の階にいるということになるんだが……それだと少年の生存率はますます低い。

俺たちがこのダンジョンに足を踏み入れてから、すでに五時間が

経過している。ルーティたちのおかげでかなり素早くここまで来ることができたが、少年の姿が消えてから十二時間ほど経っているというのは、かなり危険な状態だ。

俺は若干の焦りを感じつつあった。

と、そのときだった。

「先生。あれが問題の少年なのでは？」

ルーティが前方を指差して言った。ドレッティーナの肩に乗っているおかげで、彼女は高いところから遠くのほうまで見渡せる。

俺のほうでも、目視で確認した。

ダンジョンの床に誰かが横たわっている。

当然、俺はすぐにその誰かのところへと駆け寄った。

白いローブを身にまとった獣人族の少年だった。そばには木の杖が落ちている。

「先生、彼が？」

「ああ、そうだろうな」

短めの黒髪。頭の高いところから飛び出ている耳は猫のそれのよう。写真で見せてもらったウィルス少年の容姿と特徴が完全に合致する。

少年は気絶しているのだろう。目を瞑っていて明けようとしてもしない。だが少年の呼吸する音はたしかによく聞こえるし、ローブを着ていても分かるほど胸は上下にゆっくりと動いていた。まだ、命はある。

……しかも、無傷のようだ。奇跡的にも。

俺はその場にしゃがみこみ、少年の頬をぺちぺちと叩きながら呼びかけた。

「おい、大丈夫か？ 助けにきたぞ」

「う……う、ううっ……？ うあああっ！？」

しばらく経ってからようやく目を覚ました少年は、青い瞳を見開き、脅えたように後ろへと飛び退いた。

……かわいそうに。さんざん怖い目にあっただせいで、気が動転し

ているんだろう。

俺はできるだけ少年が安心できるように、阿呆のように、へらへらと笑ってみせた。

「怖がるなよ。お兄さん傷つくぞー」

「あ……、あ、も、もしかして学園の？ 僕を助けにきてくれたんですか……!？」

「おう、その通りだとも。俺は四季村秋彦……リノティアの先生だ。あつちは生徒のルーティくとドレッティーナちゃん。まったく災難だったな、少年。さ、こんなところに長居は無用だ。とっと帰ろうぜ。自力で歩けるか？ 肩を貸そうか？」

「だ、大丈夫です。自分で歩けます。……よかった、これで家に帰れる」

ウィルス少年は、ほっとしたように胸を撫で下ろした。

少年の身長は百五十センチくらいだろうか。黒髪と青い瞳の持ち主。顔立ちは甘くて女の子に好かれそうなタイプだったが、どうも雰囲気は弱々しく、双眸には気弱そうな光が揺れていて、ちょっと頼りなさげだった。まあそういうところが母性本能をくすぐるかもな。話に聞いていた通りの少年だ。

……さて。俺がここにきた目的は、すでに終わった。少年に言った通り、こんなところに長居は無用だ。さっさと地上に戻るとするか。

俺たちはしばらくダンジョンを歩いて転移装置を見つけると、すぐさまそれを起動した。

先頭に立っている俺が装置に手をかざし、唱える。

「開け、万里の門」

そして装置が膨れ上がり、俺たち三人を包み込んだ。あの大型転移装置のときと規模は違うが、あとはほとんど同じだ。

もうひとつ違うのは、景色がまったく違っていいほど変わっていなかったことだな。

俺たちはまだ、ダンジョンの内部にいる。

ルーティが不思議そうに首をかしげて尋ねてきた。

「先生？ どうしたのですか？」

「いや、すまん。使いかたをちょっと間違えた。一気に学園に帰るはずだったんだが、上層階へ移動しちまったみたいだ」

「……おっさんを通りこしてお爺さんになったのですか？ 脳細胞が死んでいますよ」

「なははは、手厳しいなあ、ルーティくん」

俺は髪をかきながら馬鹿笑いを上げて、そしてコートのポケットから一冊の手帳を取り出した。

「ま、こういうのもご愛嬌だと思ってさあ、許してちょ。ああ、そうそう、少年。おまえにちょっと訊かなくちゃいけないことがあったんだよ」

「え？ なにをですか？」

「いや、たいしたことじゃないよー。こういうときは本人かどうか確認しなくちゃいけないんだけどな、そのための質問。せっかくだからいまのうちに訊いておくわ。ごめんな、面倒くさいだろうけどこれも規則だから」

手帳に書いてあるウィルス少年の個人情報に目を通す。

俺は訊いた。

「少年の名前は？」

「ウィルス・ルーモニアです」

「種族は？」

「獣人族」

「年齢は？」

「十六歳です」

「生年月日は？」

「聖王暦五〇〇四年九月六日」

「所属しているパーティと、その担当官の名前は？」

「パーティは《蒼き竜巻》。担当官はブイリー・ゴードン」

「よしよし。生徒番号は？」

「はい。二四七八九〇〇二四六〇六四二九〇です」

「そうかそうか。よし、全問正解！」

「ええ、当然のことですけどね」

「うん。でも不合格。残念でした」

少年の眉間に、ごつい銃口を押し当てて、俺は言った。

俺の後ろから、ルーティが、感心したように言う。

「なるほど。はっきりとしましたね」

「だろー？ ……あのね、少年。いや少年に化けたどこかの誰かさ
ん。そんなに不思議そうな顔をしなさんな。おまえの答えは完璧す
ぎたんだよ。名前やら生年月日を答えるのは当然だ。そいつはでき
てなくちゃまずいだろう。だがな、完璧に変装して敵を騙すため
は、答えちゃいけない情報だつてあるんだよ。たとえそれが本人の
知ってる個人情報であつてもな」

ウィルス少年の姿をまねた何者かは、まだ瞳に困惑の色を浮かべ
ていた。

……生徒番号だよ、馬鹿が。生徒番号は学園創立以来、すべての
生徒に与えられているものだがね。あんな長つたらしくて不規則な
それでいて生徒にとつてはまったく実用性のない数字の羅列、誰が
好きこのんで覚えているもんかよ。俺のもといた世界でクレジット
カードの会員番号なんて誰も覚えようとしないといいしよだ。そ
んなくだらないことを覚えているとすればそれは、そいつになりき
るうとして情報を完璧に集めるあまり墓穴を掘った、どっかの間抜
けな誰かさんぐらいのものさ。

「あとな。おまえの格好はあんまりにも綺麗すぎた。 レベル七
十三の小僧が、こんな危険区域でそんな綺麗なままでいられるもん
かよ。腕の一本や二本はなくしてるだろうと覚悟してきてみりゃ、
てめえのそのざまだ。あんまり見え透いているもんだから怒りを堪
えるのに必死だったぜ」

……それでも、期待していなかったといえ、嘘になるがな。

「もうひとつだけ訊いておくか。……本物の少年をどこへやった？」

「その質問に答える必要はあるのか？ 薄汚い人間め」

耳まで裂けた口で、そいつは笑いながら言った。嘲笑だった。

直後、引き金にかけた指に力をこめる。

発砲。

超至近距離で、そいつの眉間に鉛弾をぶち込む。

そのとき俺が首をかしげて体を捻るようにすることができたのは、単純に、長年にわたって研ぎ澄まされてきた直感と経験のおかげだった。

俺の耳の肉をちょっと削って後ろへとすっ飛んでいく不可視の刃。

「先生！」

ルーティの叫びを聞きながら、俺は横へと跳んだ。そのままごろごろと地を転がり、すぐさま体勢を立て直して立ち上がる。

目の前、十メートルほど向こうに、ウィルス少年に化けていた者の正体がいた。

壮年の男だ。少なくとも外見は。身長は俺と同じくらいか。全身の筋肉は引き締まっていて獣のよう。足首まで届くほど伸ばした銀髪を、後頭部のほうへと綺麗に撫で付けている。容姿は整っているのだが、その顔には邪悪でどす黒い感情が幾重にもへばりついている。どうしようもない。漆黒のタキシードのようなものを着ていて、長いマントを羽織っていた。

青白くて血色の悪い肌。

薄い唇の向こうから覗く、異様に鋭く長い犬歯。

真紅の瞳。

外見の特徴から推察するに、正体は吸血鬼、か。人間の生き血をすすって生命を永らえる、闇夜の種族。高い知能と戦闘能力をかねそなえる、もつとも厄介な魔物のうちのひとつだ。

その吸血鬼は、大仰に両腕を広げながら、余裕たつぷりと尊大に言う。

「我が名はキルドウーヤ。《風と幻夢》のキルドウーヤだ。人間よ、ほめてやろう。よくぞ我が幻術を見破った」

「おまえの名前なんざ訊いちゃいねーよ。それよりこっちの質問に答える」

怒りをこめて、鋭く答える。

後ろからいまにも突撃しそうになっているルーティを、片手で制止。

キルドゥーヤはなにがおかしいのか、くつくつと笑った。

大口を開けて、べろんと舌を垂らす。

「あの小僧ならば、ここから入って」

その口腔の奥を、細くて骨と皮ばかりのような指で指し示した。

つぎにキルドゥーヤが指差したのは、自分の尻だ。

「ここから出て行ったぞ。いろいろと必要な情報は私の体に残ったがね……ははははは！」

発砲。

これ以上、ゲスの台詞を聞いてやるほど我慢強い耳は、俺にはない。

ドラゴンの鱗をも砕いて貫くほどの威力を持つ弾丸が、キルドゥーヤに向かって飛ぶ。

「まあ待て、焦るな、人間」

キルドゥーヤはまったくの余裕を見せ付けていた。

やつの頭部を木っ端微塵にするはずだった弾丸は、その目的を果たす直前でなぜか軌道が変わり、あさつての方角へと飛んでいってしまっている。

なにこともなかったかのように、キルドゥーヤは話を続けた。

「なぜ私が人間などに化ける必要があったのか、知りたくはないのか？ 冥土の土産に教えてやろう、我が遠大にして精緻なる計画を」

「そのくだらん話は、レベルをごまかす装置をなぜ作ったか？ ところから始まるのか？」

弾倉に新たな弾をこめながら言った。

キルドゥーヤは、初めて不遜な笑み以外の感情を顔に浮かべた。

驚きと、わずかな警戒心。

「……ほう。あれを作ったのが私だと、なぜそう思う？」

「おまえの目的は、まあ、だいたい分かる。学園に潜入して内部から破壊する、つてところだろ。冒険者を多く輩出する学園はおまえら魔族にとって邪魔でしかないからな。ダンジョンにもぐりこんできた生徒たちを上手く騙すなり誘惑するなりして装置を渡すことぐらい、幻術を使うおまえなら簡単だ。そうやって未熟者が高難易度のダンジョンに入れるようになれば自然と死者が増えて未来の戦士が減るし、装置の効果をテストもたくさんできる。で、最後の仕上げとして、完成したその装置を使って完璧に生徒に化けたおまえ自身が学園に乗り込んで、破壊工作やりまくりつてわけだ。あの装置は手帳サイズだから持ち込むのも簡単だしな。ところでそろそろ始めてもいいか？　ここで動かすべきなのは舌じゃないだろうか
らな」

六発の弾をこめた銃を、だらりと下げる。適度な脱力。だけど脚には一瞬の爆発を準備させる。

キルドウーヤは啞然としていたが　すぐ、唸り声を上げて俺を睨み付けた。

「ふざけるなよ人間の若造。小賢しいだけの、弱くてくだらぬ虫けらが、この私と勝負するつもりか？　勝てると思っっているのか、このキルドウーヤに？」

「思ってるよー」

「……そんな豆鉄砲で、なにができる？」

「おまえをブチ殺して地獄に落とせる」

言つて、跳躍。キルドウーヤに対して右側、斜め前方に低く跳ぶ。引き金を引く。

連続して響く轟音。

吸血鬼に向かって、銃弾が飛翔する。

死の鉛を、キルドウーヤは取り戻した余裕と共に迎え入れた。高笑いが響く。

「学習能力のない猿だ！　私には銃弾など通用せん！」

その通りだ。銃弾はすべて、やつに命中する直前で、軌道を無理やり捻じ曲げられてあらぬ方向へとすっ飛んでいく。キルドゥーヤにはかすりもしない。

あの現象の正体には、もう見当がついている。

風の防壁だ。強烈に、しかも局所的に発生した風の渦が、キルドゥーヤを守っている。それが俺の発射した弾丸をすべて受け流してしまっているのだ。

遠距離からの攻撃では、やつは倒せない。

だったら近距離からの攻撃ならどうだ？

俺にはかり集中しているキルドゥーヤの頭上から、ドレッティーナの斧が襲いかかった。ルーティがドレッティーナを疾駆させたのだ。山のような巨体だっというのに、驚くべき瞬発力だ。

剛力無双、キメラミノタウロスの戦斧。その威力ときたら、堅固な鱗で覆われたドラゴンの首ですら一刀両断するだろう。

だがそれですらキルドゥーヤには通用しなかった。

やつは信じがたいことに、掲げた片手で刃を掴むようにして、超重量の一撃を受け止めていたのだ。

「白兵戦でなら勝てるっても？」

にやりと、吸血鬼が口の端を吊り上げる。

その手にちよつと力をこめた　俺にはそのようにしか見えなかった　　だけだというのに、戦斧の刃が粉々になって砕け散った。舞い散る鉄の破片。

キルドゥーヤはそのまま、斧を砕いたのとは反対側の手をドレッティーナに向ける。その手の平は紫色の輝きを放っていた。

「人間ごときの手に堕ちた、哀れなる者よ。安らかに眠れ」
細く長い、紫の閃光。

鋼鉄をも焼き切るビームが横なぎに煌めいて、ドレッティーナの首をはね飛ばした。さらに連続して縦横無尽に走ったビームが、巨躯を瞬時にしてただのバラバラ死体へと変える。

悔しげに怨嗟の声を上げたのは、使い魔の戦いを見守っていたル

ルーティだった。

「よくもドレッツティーナを……！」

罪深く救いがたき者どもよ

！ その背に負う罪科を捨て去り、地獄の責め苦から逃れたいというのであれば、彼方から我が手元へと集え！」

金属の杖の石突きが、地面を叩く。

ルーティを中心として巨大な赤い魔方陣が浮かび上がった。

屍霊術の行使。新しいゴーレムを召喚するつもりか。

だがそんなことをキルドゥーヤがおとなしく許すはずなどない。

「愚か者め。隙だらけだ」

笑いながら、キルドゥーヤはぞんざいに手を振った。繰り返した攻撃はビームじゃない。もっと危険な一撃だ。目には見えない、不可視の攻撃。最初に俺の耳をちよつと削った、あれだ。

ルーティは呆然としたように目を見開いていた。自分に迫る死の運命に対して、なんの防御もできていない。まさに無防備ってところだな。

弾丸の軌道をずらした方法からも分かる通り、キルドゥーヤが得意としているのは、風の魔法だ。いま、あいつがルーティに向かつてはなったのも、やはりそれだ。殺人かまいたち。人間のひとりやふたりぐらい大根のようにぶつた切れる、巨大な真空波。

二秒、いや一秒の先の未来、ルーティは脳天から股間まで真っ二つになって死ぬ。

そして俺はそんな未来など許さない。

限界まで全力を出して走ったかいがあって、なんとかルーティを押し倒すようにして転がり、殺人かまいたちから逃れることに成功した。

やれやれ、困ったもんだ。お兄さんにあまりきつい運動はさせないでくれよ、ルーティくん。

「ルーティ。遠くのほうへ逃げてろ。あいつがそう簡単におまえに魔法を使わせるとも思えないからな」

「せ、先生」

「ほらほら、さっさと行きなさい。お兄さんの言うことはよく聞く
ものですよ」

やれやれ、コートが泥で汚れちゃったぜ。ぱんぱんと土埃を払い
のけながら、俺は立ち上がる。

銃は……さすがだな、ぜんぜん大丈夫だ。けっこう無茶な衝撃を
与えたかと思っただんだが。

戦いに支障はない。

だというのになぜだかルーティは焦っていた。

「でも、先生」

「はいはい、話ならあとで聞くから」

「血が、うで、腕が、血……！」

そういえば、かまいたちがちょっとだけ右腕をかすっていたか。

ま、たいしたことじゃないけどな。ただ感覚はないし動く気配もな
いから、この戦いで使うことはもうできないだろう。

たいしたことじゃないさ。

だからそんなに泣きそうな顔をするなよ、ルーティ。こんな腕の
痛みなんぞよりも、そっちのほうが、俺にはつらい。

「気にするなよ、ルーティくん。悪いのはあの吸血鬼野郎だ」

「でも、でもっ！ 私をかばったせいで、先生、そんな　そんな
ちぎれそうなの……！」

「大丈夫だから。睡でもつけときゃ治るよ、こんなもん。マジでマ
ジで。ほんとだって。信じなさいよ、お兄さんを。信頼しなさい。

お兄さんの半分は正しさで出ています」

ちなみに、あとの半分は意地と根性とやせ我慢だ。

俺は、無事なほうの腕で銃を強く握ってから、歩き出した。

正面では、腕組みしているキルドウーヤが、待ち構えている。

「別れの挨拶は終わったか？」

「なんの話だそりゃ？ ていつかとりあえずいっぺん死ねよテメエ
は」

狙いをつけて、正確に三回、引き金を引く。

キルドゥーヤは、嘲笑など浮かべなかった。すでに呆れたように俺を見ていた。

「馬鹿が」

「どつちがだい？」

俺はもちろん、串刺しになっているおまえのほうだと思うがねえ。キルドゥーヤは、自身の足元の床から生え出た何本もの鋭く長い杭によつて、股間から頭のとっぺんまで、あるいは脚や腕をまとめて、無慈悲に刺し貫かれていた。それでもまだ生きているというのがびっくりだが、吸血鬼とはそういうものだ。まともには死なんのさ、こいつらは。

信じがたい、とでも言いたげな表情のキルドゥーヤだったが、なにも驚くようなことじゃあないだろう。ダンジョンにはあつて当然のものだ。すなわち、侵入者を撃退するためのトラップだ。

俺が地下三十五階まで歩いているときに見つけたトラップ。

そして俺がここに 地下十六階に移した理由だ。床のとある一部分に衝撃を加えれば発動するキル・トラップさ。さっきの銃撃はおまえ自身を狙ったわけじゃない。おまえのちよつと手前にある床を狙ったのさ。いい具合にトラップの仕掛けてある場所に立っていてくれて助かったよ。

まともに身動きもとれず、もがき苦しみながら、キルドゥーヤは言う。

「ひ、卑怯な」

「おうとも。当たり前でしょうが。こちとらおまえさんの言った通りの、弱っちい虫けらなもんでね。せいぜい小賢しくいかせてもらうぜ。大人は汚いものなのです、お兄さんは卑怯なものなのです」さて、とどめを刺すとするか。吸血鬼はもともかなり不死身なんだが、見たところ、キルドゥーヤは上等な部類だ。心臓をぶち抜いた程度でも死ぬかどうか分からん。弾倉に残った三発の銃弾で、頭に二発、心臓に一発。正確にぶち壊させてもらおうとしよう。

キルドゥーヤが叫んだのは、そのときだった。

「なめるなよ、人間ッ！」

やつを体を蹂躪していた杭の群れが、一瞬にして弾け飛んで消滅する。

それをなしたのは、キルドゥーヤが全身から放った魔力の膨張だった。

怒りで赤い瞳を燃え上がらせて、鼻面には皺を寄せ、憤怒の形相で俺を睨みつけてくる。やつを穴だらけのチーズみたく見せていた無数の傷口も、すでに塞がっている。魔力で無理やり治療したのか見かけによらず荒っぽいことをする。

「ゆるさん、許さんぞっ……！ よくも私の体に傷を！」

「もう治っただろ。かたいことを言うなよ」

「黙れクズッ！」

やつはあまりの怒りのために、自分の手で俺を殺さなければ気がすまないとも思っただのだろう。魔法も使わずに、直接、その爪を鋭いカギ爪へと変化させて、襲いかかってくる。

吸血鬼という種族のもっとも恐ろしい点は、その高い知能や魔法力、眷族を増やす能力じゃなくて、突出した身体能力にこそある。

ミノタウロスの斧をも受け止める馬鹿力。そして、残像すら生む速度で駆ける瞬発力。

俺とキルドゥーヤのあいだにあった十メートル近い距離が一瞬で消し飛んだ。

まるでコマ落としのよう。

それほど、吸血鬼は素早い。

ルーティの悲鳴が聞こえた。

心配するなつて。大丈夫だからさ。

斜め上から俺の首を狙って振り下ろされるカギ爪を、低く身をかがめるようにしてやり過ごす。と同時に草を刈るような回し蹴りを放った。足を払われて体勢を崩したキルドゥーヤの胸を、対空砲火のような蹴りで吹っ飛ばす。

少し、浅かったか。骨を砕いた感触はあるんだが、その程度では、

不死身の吸血鬼にとってたいしたダメージにはならない。

驚愕の表情を浮かべる、キルドウーヤ。

怒りすら忘れたかのように、俺から飛び退くようにして距離をとった。

「馬鹿な……貴様、人間の分際で、なぜ私のスピードについてこれる？」

「さあて、なぜだろうねえ」

はぐらかすように、おどけて言う、俺。

実際は、そんなに余裕はないんだけどね。

心臓は限界まで鼓動を早めていて、いまにも爆発しそうだ。全身の筋肉が悲鳴を上げている。体温が異様なまでに上がり続け、冷や汗が流れては蒸発する。たとえようもない昂揚感が全神経を支配している。

……ただの普通の高校生が、どうしてこの世界で冒険者としてやっていったのか。

その答えが、この能力だ。

能力というよりは、肉体の欠陥を逆手にとったものでしかないけどな。

周知の事実かもしれないが、人間ってやつは、普段から肉体の能力をすべて使って生きているわけじゃない。使用しているのは全潜在能力のうちほんの一部……せいぜい二割から三割ってところだ。もしも十割の全力を使うとなると、肉体はそのあまりの過負荷にたえられずに崩壊する。だから脳みそが制御装置の役目を果たして、体の力加減をコントロールしているのさ。

ただ、俺の場合、その制御装置が、ものの見事にぶっ壊れちゃまっている。

あれは、俺がこの世界にきたばかりのころだ。なにがなんだか分からなくて、あてもなく野山をうろついていた俺は、山中で一匹の魔物と出会った。たしかゴブリンだったかな。で、当然、かなうはずもなく、悲鳴を上げて逃げ出したんだが、頭の後ろを棍棒で思い

つきり殴られた。結果を言うなら命は助かったが、深い傷を負い、そのときの後遺症で俺は肉体のリミッターを自由に解除できるようになったというわけだ。

だから俺は、人間の本来の能力を、完璧に自由に使用できる。

「アキヒコ、シキムラ」

キルドウーヤが呟いた。

なにか、思い至ったことでもあるのか。

やつは瞳には、理解の色があった。

「そうか、どこかで聞いたことがある名前だと思っていた。く、くつくつく……！なるほどな。思い出したぞ。我らにすら匹敵する身体能力と、珍妙なる真名！なるほど、貴様がそうなのか！」

どこか引きつったような笑い声。

極めて獰猛な唸り声を、やつは上げた。

「アキヒコ・シキムラだと？二つ名のほうが通りがいいぞ　　三

スター《ノー・カウント》ッ！」

《ノー・カウント》。懐かしい名を口にするやつだ。

もう、とうの昔に、どこかの墓場に置き忘れてきた名前だ。

馬鹿なクソガキが馬鹿に生きたがゆえに手に入れた、くだらない二つ名だ。

そんなくだらないものでも、キルドウーヤにとっては愉快だったらしい。

やつは舌なめずりしていた。

「バルログ公爵、ルドヴィッツヒ將軍……そしてジャランバヤ王子！我らが同胞を幾人も葬り、地上支配という崇高なる計画を幾度にもわたって邪魔をした貴様を、まさかこの私の手で始末できる日が来ようとは」

古い話を持ち出すなよな。もう何年も前の話だぜ。

ていうか、全人類抹殺計画っぽい話なんぞ、そりゃ全力で阻止するっての。

キルドウーヤは酔ったように恍惚として、両腕を大きく広げて掲

げ、大声で叫んだ。

「《ノー・カウント》よ！ 貴様の滅びの日は来たり！」

「略してノーカン先生だ。親しみをこめて呼んでくれたまえ」

キルドウーヤの横に立ち、その顎の下に銃口をめり込ませて、俺は言った。

「外してみせな」

この距離で、さっきまでのように外せるものならな。

轟音。

密着した状態から、ゼロ距離で銃弾が炸裂。最期の瞬間に吸血鬼が浮かべていた動揺と恐怖の表情をすべて消し飛ばし、鉛の塊が天井めがけてすつ飛んでいく。

頭部の前半分を失って、それでもまだ立っているキルドウーヤの、心臓と、後頭部に、俺は銃弾を叩き込んだ。無慈悲に、情け容赦なく。

キルドウーヤの死体はその場で灰と化し、それもすぐに淡雪のように消えていった。

おまえを倒すために、俺はいろいろと小細工を仕掛けたが……最初にして最後の小細工は、小細工を使わなくてもおまえを倒せるということをお隠すことだった。それを見抜けなかったのが、キルドウーヤ、おまえの一番の敗因だ。

俺がなぜ《ノー・カウント》と呼ばれているのか。その理由は、いま見せたようなスピードにあるらしい。敵を殺すとき、秒読みすら許さずに瞬時にして殺すから、《ノー・カウント》なのだそう。自分でつけたわけじゃないがね。

だが、俺に言わせれば、《ノー・カウント》とは、カウントできない。つまり、数えられていない、という意味のほうが、らしい。つてもんだ。異世界からの侵入者。この世界の住人として数に数えられていないこの俺に、なんともふさわしい名前じゃないか。

……あと、魔法をひとつも使えないからだとか、なぜかレベルを測定できないからだとか、そんな理由もあるらしいが。少なくとも

いまの生徒たちに知られている由来は、そっちなんだよなあ。

「ひどいひと」

いつの間にか近寄ってきていたルーティが、言った。その声にはなぜか怒りがこもっているように聞こえた。なぜかうつつむいている。「そんな力があるだなんて。一階のミノタウロスのとくだって、本当は自力でなんとかできたんじゃないですか。……私、馬鹿みたい。嬉しかったのに。あなたの助けになれて嬉しかったのに」

「おいおい、なに言ってるのよ、ルーティくん」

それは、大きな誤解というものだ。

「言つとくけどね、さっきのはものすごく疲れるし健康にも悪いんだぜ。朝のコーヒーに入れる砂糖の量すら減らしてるお兄さんが、そんなほいほいとこんな力を使えるわけがないでしょうが」

事実だ。

吸血鬼の超反射神経と超動体視力を凌駕するために酷使した俺の肉体は、いまにもバラバラになりそうなほど苦悶の声を上げている。こんなの、最初から使いつばなしでいられるわけがない。どうしようもないときだけの、本当の意味での奥の手だ。今回だって使いたくはなかったがしょうがなく使った。

「だからな、ルーティ。あのときは、マジですごく助かったんだぜ。ありがとうな。……邪魔だなんて言って悪かったよ。俺が間違ってた。いつの間にかちゃんと立派に強くなってたんだな」

銃を仕舞って、ルーティの頭を撫でてやる。最初に出会ったときと比べれば、けっこう背も高くなって、成長したもんだなあ。

やっと顔を上げてくれたルーティは、ちょっと迷惑そうに眉根を寄せていたが、俺の手を払いのけたりはしなかった。

「ほんと、ひどくて、ずるいひと」

「まあね。大人はひどくてずるいものだよ」

「……いつか絶対に、あなたの横に立つにふさわしい術士になりますから」

蒼い瞳に決意を浮かべて、ルーティは言った。

俺はというと、けっこう複雑な気分だったりする。

「その気持ちは嬉しいけどね。あんまり俺には懐かなくてもいいよ。なにせ俺は、おまえさんの親父を殺したんだ」

そう。そしてそのときこそが、俺とルーティとの出会いだった。

稀代の屍霊術士にして狂気の復讐鬼、ガルデレール・エルディナマータ。

俺は五年前、あの恐るべき最凶のネクロマンサーとの死闘に辛くも勝利し、そして、親をなくしたルーティを拾ったのだ。

とはいえ、子育てだなんてそんな器用なこと、俺に出来るはずもない。稀有なほどの才能を持つていたということもあって、マーキアス先生のところへ預けることになったのだが……なぜかルーティは俺に懐いてしまっていたりするのだ。

で、俺はというと、そんなルーティの気持ちを嬉しく思う反面、ちよつと、いやかなりまずいんじゃないかと思ったりもする。

やっぱり俺はルーティの父親を殺した男だ。なにがどうなるうと、その事実だけは曲げられない。そしてそんな男と仲良くするなど、残された娘としてはどう考えたっておかしいだろう。

ルーティは俺を殺すべきだし、俺はルーティに殺されるべきなんだ。本当はね。

でもこの娘つたら、よく言えば味のある子なんだが……悪く言えば変わっている。

「そうでしょうか？ いたってまともだと思いますが」

「ええー、変だよ、ぜつたい変だつて」

「父は復讐心で我を忘れ、死ぬべくして死にました。……彼を妄執から救っていただいた先生にはお礼を申し上げます。それだけです。ですから私と先生の愛を阻むものなど、なにもないのですよ」

につこりとほほ笑む、ルーティくん。

うーん、なにかが阻んでほしい。

……隠してもしょうがないことだからはっきりとっておくが、半年前、ルーティから愛の告白つてやつをされてしまった。

もちろん断ったがな。

ま、俺もルーティのことは好きだけども、これは恋愛感情なんかじゃないしな。かわいい妹ってかんじ？ だいたい俺は教師なのであって、生徒から告白されてもけっして手を出せないのである。ちやんとした同年代の恋人を見つけてほしいもんだ。

いつかきつと、まともな幸せというものをルーティに教えてやる。それが俺の使命なんだ。うん、きつと。

「矯正するおつもりなのでしたら、どうぞご自由に。どうせ無駄な努力ですけど」

こつちが不安になるほど自信たつぷりとしているルーティは、俺の右腕に手を触れた。その、血まみれの棒切れに。

「服を脱いでください」

「ええー？」

「変な想像をしていたらダメでもけっこうですが、今回は治療のためです。マスターからいただいた、とっておきの秘薬がありますから、やたらとときぱきとしたルーティの治療を受けながら、俺は、ため息をついた。

……幸せがダース単位で逃げていつてるんじゃないだろうか、これ？

学園の廊下にある窓から外の風景を眺めて黄昏ていると、背後から声をかけられた。

「また、無茶をしたそうだな」

「んー、そうなのよ。お兄さんってばもう、がんばりすぎちゃって体がガタガタ」

振り返りながら、肩をすくめてみせる。腕の傷はすでに完治している。ルーティの治療が適切だったというのもあるが、この学園に

は腕のいい治癒術士が山ほどいるのだ。

声の主は、女だった。長くて尖った耳を持つエルフ族。しかもただのエルフではなく、ハイエルフと呼ばれる上位種族だ。年齢は二十代前半つてところだが、長寿を誇るエルフ族だから見た目は信用できない。身長は女にしては高いほうで、たぶん百七十五センチくらいか。腰まで届くストレートの金髪は流れるよううで、本物の黄金のような輝きを放っている。高い鼻と切れ長の涼しげな瞳、恐ろしいほど整ったかんばせ。そしてエルフの女というのはたいがいガスレンダーな体つきをしているものなのだが、こいつはちがった。やたらと豊満な胸とくびれた腰、肉付きのいい尻や脚のラインが素晴らしい肉感的。それはゆつたりとした緑色のローブに包まれていてもなお、男の視線を魅了してやまない。

エルフ女の名前を、シエラザード・ウォーティンハイムといった。この学園の教師のひとりにして、俺がかつて所属していたパーティのメンバーでもある。

「《イゾルデ大迷宮》に行ってきたのか」

「生徒がひとり迷子になっちゃったもんでね」

「おまえのせいではない。気にする必要はない」

シエラザードの声は硬く、冷たく、そして俺を気遣う慈愛に満ちていた。

ウィルス少年は結局、死体すら見つからず、二度と地上に戻ることはなかったのだ。

ルーモニアという名の大富豪のことは聞いたことがある。救出に向かわされたのは、そのあたりが理由なのかもしれないが……俺にとってはどうでもいいことだった。

大切なのは。

あの少年は、何も知らないただのガキにすぎず、そして俺はそんなガキですら満足に助けてやることもできなかった、真正正銘の役立たずのクズだってことだ。

「気にするでしょ、普通。生徒が死んだんだよ。教師としてはね…

…やっつけられないよ」

いまの言葉、自分でも気だるげに聞こえた。

シエラザードの瞳が、険しさを帯びる。

「おまえのせいではない」

「分かってるよ」

「いいや、分かかっていない。おまえはいつもそうだ。ひとりで勝手にすべてを背負い込む」

……背負いたくて背負っているわけじゃないさ。ただ、仕方がないだろう。気付けば勝手に背中荷物が重みを増しているんだ。そしてこれを捨てることなど、俺にはとても出来ない。捨てれば簡単に楽になれるのにな。不器用な自分の性根が恨めしい。そして背負いきれない自分の弱さには反吐が出そうだ。

「しかも、またリミッターを外したのか」

「あら、なんで知ってるのよ。……ちよつとだけな。今回の敵ってけつこう強くてさ」

「死ぬぞ」

「はっはっは、大げさな。まあ明日からしばらくは地獄の筋肉痛だろうけど」

「……いまさら忠告することではないが、おまえの肉体はすでに全盛期ではない。十年前からの限界を超えた酷使によってボロボロなんだ」

そんなこと、知っているさ。

自分の肉体なんだから、俺自身こそが誰よりもよく知っている。

もう昔のように大剣も使えず、銃などに頼っていることから、それは明らかだ。

いまの俺には、全盛のころの十分の一ほどの強さもないだろう。けど、それでも俺は戦うよ。

「でもさあ、仕方ないじゃん。生徒の安全を守るためなんだから俺がそう言うと、シエラザードはなぜか悲しげに、俺を見た。

つらいな。

仲間にそういう目で見られることのつらさといったら、もう、すごいぜ。

「それはともかくとして」

「つらかったので、話題を強引に切り替えた。」

「イズルデに入ってみて、どうもおかしいと思ったんだが……やたらと魔物どもの動きが活発だ。そこにいるはずのないほどレベルの高い魔物が普通にいたりするし、ちゃんとした計画を立てて動いている野郎までいやがった。なにか、きな臭い」

「大きな事件の前触れだとも？」

「さあて、ね。まだ分かんが……その可能性も十分にあるってことだ」

「ゾルディアス先生には報告したのか？」

「うん。ま、先生のほうは先生のほうで、ちょっと動いてるみたいよ」

「……おまえは、動くのか？」

「はっはっは、いい冗談だ、シエラザード。こんなおっさんになりかけのお兄さんに精力的な活動なんて不可能よ。状況を見て、どうしても必要だと思ったなら戦うまでさ」

「まだまだ、なにがどうなっているのかも分かっていないしな。」

闇雲に戦っていられるだけの体力も精神力もあつた十年前とは違って、いまの俺にはかつてあつたすべてが足りない。残つた数少ない力の使いどころは、よく考えて見極めておかなくちゃな。

「……それにな。どうにもこうにもしょうがないことなんだが、俺の時代はもう終わってるのよ。明日を作る役目は若い連中に任せるさ。お兄さんはゆっくり確実におっさんになって、そしてジジイになつて死んでいきたいね」

ああ、そうだ。俺の物語はすでに幕を閉じている。パーティのメンバーも、ひとりは消息を絶ち、ひとりは遠く離れた地に旅立ち、そしてあるいは死んだ。六人は散り散りになって、すぐに連絡を取れるのは、こうして同僚として働いているシエラザードだけだ。

黄昏を感じる。

俺の物語ってやつは、きつと、あいつが死んだときに終わりをむかえたのだ。

と、俺らしくもなく感傷に浸っていると、いきなりむんずと襟首を掴まれた。

目の前にはハイエルフの壮絶な美顔。

「な、なんですかシエラちゃん」

「飲むぞ。付き合え」

「はいい？」

いきなりなに言い出すの、この子？

びっくりしている俺に有無を言わず、シエラザードは歩き出す。「今日は飲む。とことん飲む。おまえのその不景気な顔が蕩けてなくなるまで飲む」

「いや、ちよつ、待つ、俺はあんまり酒には強くないんだって知ってるっしょ!？」

「知っている。知るか」

どっちだよ。

「心配するな。私のおごりだ。先日、いい店を見つけてな。人生が変わる気分を味わえるぞ」

にやりと笑う、シエラザード。超絶の美形ぞろいで知られるハイエルフの不敵な笑みってやつは、実際に間近で見るとゾツとする。なんていうのかな、本能が告げる危険ってかんじ？

……この子、昔はこんなキャラだったかしら？ などと疑問に思う。

結局、二日酔いと筋肉痛の二重苦によって、俺はつぎの日の出勤をあきらめざるをえなくなった。

まったく、やれやれ、しょうがないな。

いい仲間を持つと苦労する。

だからこの世はやつぱり、悪いことばかりじゃないのだな。

〈ノーカン先生〉（後書き）

）、・・、（いかがでしたでしょうか

これにて第一話は終了になります

もしもこの作品を面白いと思ってくださった読者さん、ぜひとも感想をくださいませ

作者は狂喜乱舞してしまいます。

読者さんの温かいお言葉があすてかの原動力なのです。

《ティーバック》

目が覚めた。

あたまが痛い。

視界がぐらぐら。首がぐらぐら。

「……………最悪だな、これは」

ひどい頭痛。口の中が粘ついていて気持ちが悪い。胃腸が重い。胸焼けがする。

昨夜、飲みすぎたせいだろう。

俺は、見事なまでのステータス異常、その名も二日酔い状態に陥っていた。

「うぐおおお……………」

うなり声を上げながら、なんとか半身を起こす。

ボッサボサの髪のまま、ぼんやりと思考回路を回転させてみた。

……………どうして二日酔いなんかになってしまったんだっけ？

俺は、あまり酒を飲めるような体質ではない。それは自覚している。だからいつもは、こんなに気持ちが悪くなるほど飲みすぎるということは絶対にしない。

となると、こんなになるまで俺に酒を飲ませた人物が存在すると思うのだが。

いた。

いましたよ、奥さん。

俺を二日酔いのどん底にまで叩き落した犯人が、すぐ横に。俺を床で寝させておいて、自分は柔らかいベッドで安眠なさっているお方が。

金細工のような長髪と、白磁の肌。おそろしく整った容姿。どでかいバストと魅力的なヒップ。とにかく抜群のプロポーションのハイエルフ、シエラザード・ウォーティンハイム。

ようやっと思い出した。

あのウィルス少年行方不明事件から、はや一週間。

俺は昨夜、このエルフ女に連れ去られて、無理やり酒を飲むことを強要されたのだ。いったい何件の飲み屋を梯子したのか定かではない。

よくよく周囲を見渡してみれば、ここは俺の自室ではなく、教員寮にあるシエラザードの部屋だ。俺の部屋はこんなに落ち着いた雰囲気の高級家具とか置いてないもの。

昨夜の状況を、ちよつと回想してみよう。

『……だあいたいだなあつ、……ひつく！ あきひこおつ！ 聞いてるかあつ！？』

『あ、はい。聞いてます。はい』

『ようし！……だあいたい、おまえは、無茶をしすぎる！ むかしつからそうだ！』

『いや、でもさあ』

『くちごたえするなああつ！』

『ごめん、謝るから声をもうちよつと低くしよう、静かにしよう、な？』

『ん……おつつ……わかつたあつ、ひつく！ うつく……うえええええつ……』

『ど、どつたの、シエラちゃん』

『わ、私だって、ほんとはこんなに怒鳴りたくないっ……でも、おまえが、おまえがいつまでも無茶ばかりして、私を心配させるから、仕方なく……うえええええつ……』

『ごめん、ほんとごめん。これからは気をつけるから。泣き止もう？』

『う、うううつ……ぐすつ……ひつ、ひつく……』

『相変わらずの絡み酒のうえに泣き上戸か……手に負えねー』

『なんか言つたかあつ！？』

『いえ、なにも言つてないです、はい！』

『……まあ、いい……。そんなことよりもおつ！ おまえは最近の

世界じよーせーについて、どう思ってるんらろっ!?!?」

『いや、まあ、大変だよな、いろいろと』

『そうらろ! だがらあ、わらひが、じよーおーさまになって、すごいことしてやるんらろ』

『ははあ』

『みんなお酒のみほーだいできるよーに、ほーりつ変えるんらー!』

『えっ』

『すごい、いい気持ちらー!。みんなお酒飲んでいい気持ちになっら、戦争だつてしなくなるんらよ! ぐっどあいでいーあ! んんっぐ、んんっぐ、ぐびぐび』

『シエラちゃん、もうヤバいって……このへんにしところか? そろそろ寝ようぜ?』

『うるさい……だいたい、おまえ、まだぜんぜん飲んでないらお』

『いや、俺は下戸だし、勘弁してよ。もう許容量を超えちゃってるし』

『うるさい飲めーっ!』

『な、なにをするきさまー!』

『……えへへー、あきひこー、いっしょに気持ちよくなるー!』
『などなど。』

もはや、人格崩壊してらっしやっただよな、シエラザードさん。

昨夜のことは、俺の記憶の中に封印して、けっして外には出さない。墓場にまで持っていくことに決めた。

……というかね、シエラちゃん。
なぜに下着姿なの?

そう、なにやら気持ちよさそうに安らかな寝息を立てているシエラザードは、普段着のローブを足元のほうへと脱ぎ捨てていて、扇情的な下着姿を惜しげもなく俺に晒していたのだ。しかも黒か。破壊的にセクシーだな。

もしも俺とシエラザードがまったくの他人であったなら、俺はここでこのエルフ女を襲ってしまっても無理はなかった。

だが、残念ながら いや、なにが残念なのか俺にはよく分からんが 俺とシエラザードは、お互いのことを知りすぎているほどに知ってしまったている、元・冒険者パーティーのメンバー同士だ。長いことダンジョンの探索をやっていると道中でいろいろあるわけ、俺もシエラザードも、お互いの裸を見たことぐらいはあったりする。

そういうわけで、理性はぜんぜん大丈夫。

俺は心の中で素数を数えながら、とりあえずシエラちゃんを起こすことにした。

ちなみに俺はちゃんと服を着ています。念のため。

「おい、起きろ。そろそろ起きないと今日の授業がやばい」

「ん……？ んー、んう……まだあと五時間……」

「五時間？ 五分じゃなくて？」

「アキヒコ……おまえも知っている通り、われらの寿命は千年を越える。ゆえに時間にはけっこうおらかなのだ……人間がいうところの五分が五時間、十分は三日になる……むにゃむにゃ」

「アバウトすぎるだろエルフ族。いいから起きろってば。あと服も着ろ」

ベッドの下に落ちていたローブを、芸術的な肢体の上にかけてやる。布団ぐらい着ないと風邪をひきそうなものだが、まあ、エルフだから大丈夫なんだろう。華奢に見えて、けっこう丈夫な種族だし。

シエラザードはぐずぐずしながらも身を起こした。寝ぼけまなこのまま、くしゃくしゃと頭を搔いている。

「……私はどうしてこんな格好をしてるんだ？」

「寝ぼけて脱いだんだろ。言っとくけど、俺が脱がしたわけじゃないよ」

「ふん……おまえにそんな度胸があったなら、私は苦労していない……」

「なんの話？ つーか、俺はもう帰るわ。さっさと風呂に入って、学校に行ってくる」

「うん……」

「シエラちゃんもさっさと目を覚ますように。で、ちゃんとメシ食ってから働くんぞぞ」

「わかった……」

ほんとに分かつてるのかねえ？

ぼんやりしたまま生返事を繰り返すシエラザードを見てみると、ちよつと不安になってくる。

こう見えて普段は冷静沈着、クールな言動を崩さない大人の女だ。

その際立った美貌と実力、頼りがいのある性格のため、学園の教師生徒を問わず、絶大な支持を集めている。学園の内外にファンクラブが乱立していて、統合するかしないかで揉めに揉めているんだっけ、たしか。

そんな超人気美女なのだが……その実態というか、私生活はけっこうだらしないと知っているのは、俺を含め、数少ない人物に限られる。

なにせ酒は飲むわ飲まれるわ、三食のうち二食は平気で抜くわ、時間にはルーズだわ、何日も同じ服を着ていたりするわ、脱いだ下着で部屋を散らかすわ、とんでもない不良エルフだ。

俺と出会った当初は真正正銘、まったく隙のないクールビューティだったんだけどなあ。どうしてこうなっちゃったのかしら。

ため息をついていると、不意にシエラザードは立ち上がった。

「水……」

呟いて、ふらふらーっと部屋の外に向かっていく。キッチンにでも行くのだろうか。

俺はその後ろ姿をなんとなく見送って、ぎょつとした。慌てて視線をそらし、全力で素数を数える。

……ティーバックか。侮れん子だ。

〈問題児〉

俺もいちおう教師なので、当然、受け持っている科目の授業がある。迷宮探索のための基本講習……ようするに、初心者のためのチュートリアル。

ダンジョンを歩くときにはこんなことに気をつけましょう、こういうことは危険だからやらないようにしましょう、こういう場合はこういうふうに対処するのがよろしいでしょう、と、そんなことを教えている。

当然、ちよつとレベルが高くて迷宮探索に慣れてきた連中なら、こんな授業には見向きもしない。俺の授業を受けるのは、ピカピカの新人生やら、ヒヨっ子やら、とにかくダンジョンのダの字も分かっていないような超初級者ばかり。

ま、ちよつとシヨボイのは否定しないが……俺の経験を活かすことによつて生徒が育ち、優秀な冒険者にもなってくれるなら、と思うと、やりがいのある仕事だと感じる。

今日は朝から授業開始。

場所は、学園の誇る超最低ランク初心者向けダンジョン、ただの洞窟。洞窟だけど松明がいろんなどころにあるおかげでかなり明るい。いちおう魔物が出没するものの、数は少ないし、スライムやら蝙蝠もどきやらの最弱種族ばかり。

とはいえ、やつぱりダンジョンはダンジョンなのである。

「うひょー、俺つえええええ」

ドワーフAが飛び出した！

スライムはおびえている！

ドワーフAのこうげき！

「くらえ必殺の斬魔剣　！」

しかしこうげきは外れてしまった！

「あちゃー、はずれちまったよ。しかたねー、もういっぱいだあー」

スライムのターン。

スライムは怒っている！

スライムは仲間を呼んだ！

スライムBがあらわれた！

スライムCがあらわれた！

スライムDがあらわれた！

スライムEがあらわれた！

スライムFがあらわれた！

スライムGがあらわれた！

なんと……スライムたちが合体していく！

スライムたちは、キングスライムブローリー三世になった！

ドワーフAはおびえている！

「は、はわ、はわわわわ……」

ドワーフAはにげだした！

しかしまわりこまれてしまった！

「ぴぎゃー！ たすけてええええっ」

ドワーフAは泣き叫んでいる！

キングスライムブローリー三世の攻撃！ ビッグバンアタック！

俺は、ドワーフの少年がスライムの巨体に押しつぶされてしま

う前に、銃の引き金を引いた。

ドガン、という凄まじい音が洞窟内に響き渡る。

巨大な合体スライムは弾丸一発で木っ端微塵になって吹き飛んだ。

尻餅について呆然としているドワーフくんに歩み寄る。

「あのねー、きみ。勝手に先行しちゃ駄目だって、さっき言ったで

しょ？ ダンジョンは危険なんだから甘く見ちゃいけないの。わか

った？」

涙と鼻水を垂れ流しながら、ドワーフ少年はコクコクとうなずいた。

俺はその頭を撫でてやってから、うしろに振り返る。

二十人ほどのヒヨっ子たちが、一様にぽかんと口を開けていた。

「はい、注目。スライムは弱っちいモンスターだけど、油断しちゃ

いけません。半固形だから刃物の攻撃は通じにくいし、消化液を吐き出してこっちの防具を溶かすし、動きは意外と素早い。それと、すぐに仲間を呼ぶ。いまみたいに合体されたら、きみらじゃ手も足も出ないよ。だから先手必勝、さっさと鈍器でグツチャグチャに潰すとか、魔法で吹き飛ばすとか、そういう対処がベターです。消化液が目に入ったらすぐに聖水で洗い流して、保健室に直行してね。分かったひと、挙手してー」

「はい、と、手を挙げる生徒たち。うんうん、じつに素直ですばらしい。」

と、こんな感じで、俺の学園での仕事は進んでいくのだ。

昼ごろには、今日の受け持ちの授業はとりあえず終わった。

ここからはのんびりと昼寝して定時には帰宅、といきたいところなんだが……そうもいかないのよね、これが。

空を見上げてみると、ちょうどいいところにひとりの生徒が飛行していた。

「おい、そのきみ、ちょっといいかー？」

「なんスか、せんせー？」

バツサバツサと翼を飛ばたかせながら降下してきたのは、バードマンの男子。

バードマンとはその名の通り、鳥と人間が融合したような姿をしている、亜人の一種だ。鳥の頭と翼と羽毛、人間の手足と知能。それらをあわせもっている。商才を持つ者が多く、仲間想いで、人間族とはけっこう友好的な関係を築いている、気のいい連中。

見た感じ、高等部の生徒に見えるバードマンくんは、俺はちょっと頭を搔きながら言った。

「いやー、五番街に行きたいんだけどさ、いい足がないんだよね。よかったら乗せていつてくれない？」

「パーティールームのどこにスか？ いいスけど、爪で掴むことになりませよ」

「だいじょぶ、だいじょぶ。俺ってけっこう丈夫だから」

「そっスか。んじゃま、失礼して」

と言つて飛び上がったバードマンくんは、その二本の脚の先についている鋭いカギ爪で俺の両肩をがっしりと掴み、そのまま苦もない様子で舞い上がった。さすがは宅配便なども請け負うことが多い種族だ。俺の重量なんてものともしない。

あんまり優雅でもない空の旅を楽しむこと十五分。

やっとこさ見えてきたのが、リノティア学園の居住区五番街。

俺はバードマンくんにお礼を言つて、地上に降り立った。

この学園には生徒たちによって組まれたパーティーが数え切れないほど存在していて、そのひとつにつきひとりの教師が担当官として付き添っている。

担当官のやるべきことは多い。パーティーのメンバー、ひとりひとりの健康管理、精神面のケア、進路指導、戦闘の訓練、多くの学業の指導、スケジュールの管理、果ては恋路の相談に乗ったりと、とにかくなんでもやらなくちゃならない。

……そう、当然、俺にも担当するパーティーがあるのだ。

教師よりも生徒の数のほうが圧倒的に多いので、ふたつやみっつのパーティーを担当するひとも多いが、俺が面倒を見ているのはたったひとつのパーティーだ。

《リノティア・バーニングボンバーズ》。それが、俺が担当するパーティーの名だ。

学園では、生徒たちの組んだパーティーのために、部屋が設けられている。そのパーティー専用の一室だ。これをパーティールームという。生徒たちはそこを拠点として寝泊りしたり、戦術を組み立てたり、アイテムを保管したり、いろんな計画を立ててダンジョンに挑んでいくわけだ。もちろん、個人のための個室も、ちがう場所に用意されている。

で、パーティールームのみで構成された建物がいくつもあって、これの規模だけでもとてつもないことになっている。基本的に俺の世界での高校の部室みたいなものだが、ただの学生寮だと甘く見ていると、度肝を抜かされることになってしまう。なにせ増設に増設を繰り返した結果、どこの大都市なのかって規模にまで膨れ上がっているからな。

パーティールームにもレベルというか、序列がある。より優れたパーティーほど、広くて居心地のいい、高級な部屋に入ることができる。学園の発展に貢献したり、メンバーのレベルが上がれば上がるほど、高い階層の、豪華な部屋をパーティールームにできるのだ。かつて俺が所属していたパーティー《黄金の栄光》がパーティールームにしていたのは、どこよりも背が高く美しい建造物の、それそのものだった。つまり、たとえるとするなら、超高級マンションの一階から最上階まで丸ごとぜんぶ、《黄金の栄光》の拠点として使っていたのだ。あそこはもうほとんど王侯貴族の住むところだったな。単なる学生の住むところとしては凄まじすぎた。

《英雄の神殿》と呼ばれるあの建物を目指すことが、ほとんどの生徒が胸に秘めている目標のひとつだったりする。

あそこを使ったパーティーにいたというだけで、将来は国家の要人になること間違いなし。宮廷魔法顧問とか、將軍だとか、そういうった輝かしい地位が約束されているとまで言われている。実際、それは間違いじゃない。いや、俺はただのしがない用務員だが。

ようするに、餌だ。美味そうな餌をちらつかせて、生徒たちのやる気を煽っているわけだな。

あまり気味のいい話じゃないが……やる気は必要だ、たしかに。と、俺の担当しているパーティーの部屋を見つけた。

どこよりもみすばらしく見える建物の、一階の、一番奥の部屋。別名、《初級者の寢床》だとか呼ばれる部類の、もっともレベルの低い部屋のひとつ。オンボロの、小汚いところだ。

木造の安っぽくて薄っぺらい扉をノック。

「はい、先生ですよー」
返事はない。

居留守のようだ。

俺はさっさと扉を開けた。鍵は、かかっていたなかった。

室内をちよつと見渡してから、ソファに腰掛けてふんぞり返っているひとりの生徒に眼を向ける。

椅子に座ったまま机の上に脚を投げ出している彼の名は、ガゼル・ディプロ。

高等部二年生の、剣使いの戦士だ。

ぼさぼさの白髪。紅の瞳。先の尖った、長い耳。身長は俺よりもちよつと低いぐらいか。シャツの前のボタンを外しているせいで、褐色の肌が覗いている。瘦身は鍛え上げられていて、しなやかな獣のよう。女子に好かれる顔立ちをしているのだけど、眼に宿す光がギリギリとすぎている。むやみやたらと殺気をまき散らす、手負いの獣のような少年だ。

ガゼルの種族は、エルフだ。それもただのエルフではなく、ダークエルフだった。

この学園は信じられないほど広いが、ダークエルフの生徒となると、けっこう珍しい。

その理由は簡単。ダークエルフが迫害を受けている種族だからだ。

エルフは神の栄光を浴びて育つ、清らかな精霊のような種族だという。

それに対してダークエルフは、かつてエルフだった一族が、悪魔の誘惑に負けて暗黒面に墮落した、忌むべき邪悪の種族なのだ、とか何とか。

エルフとダークエルフの対立は有名だし、ドワーフやホビットもあまりいい顔はしない。人間族とは、比較的には友好的な関係だが、宗教によつてはダークエルフを敵としているところもある。

というわけで、ダークエルフは滅多なことでは人里に姿を現さない。山奥とか洞窟とかの僻地に集落を作って、ひっそりと隠れ住んでい

ることが多い。

まあ、俺に言わせてもらえば、ダークエルフが邪悪な種族だっていうのは、ただの迷信だ。たしかに、ダンジョンでは敵として出会うこともある奴らだが、人間族の海賊や山賊と遭遇することのほうがずっと数多い。

人間やエルフにだって悪い奴といい奴がいる。ダークエルフだって同じなのだ。それを学園がちゃんと承知しているからこそ、こうしてダークエルフを生徒として受け入れている。ダークエルフの教師だっているんだぜ。

で……このガゼルくんがいい奴なのか悪い奴なのかというと、だ。

「ガゼルくん、また勝手に先行してトラップにひっかかったんだって？　だめだよー、そういうことしちゃ。いつも言ってるでしょ、ダンジョンでは慎重な行動を心がけてね、って」

「うるっせーよボケ。人間のくせに俺に意見してんじゃねーよ。死ぬ」

うむ。クソガキです。

やれやれ……もう担当官になって三ヶ月が過ぎようとしているのに、ぜんぜん懐いてくれないなあ。もうずっとこの調子よ、この子。ギリギリしたまま、トゲだらけ。俺を見る目は完全に敵を見る目です。だけどもめげない、俺。泣いちゃ駄目。

「あのね、ガゼルくん。俺はこんなんだけど、いちおう教師なの。きみらのパーティーの担当官なの」

「はあ？　知らねーよ」

ぬう……手ごわい。

ガゼルはけっこう実力があるのだけれども、プライドが高くて攻撃的で、チームワークを軽視するので、いろんなパーティーから追いつ出されてきたという経歴がある。

俺もいままでにそれなりの数のパーティーを担当して、たくさん生徒を見てきたわけだけど……正直、ガゼルの扱いには手を焼いている。

うっうっ……」

「泣くなよアホ。だいたい俺だつて来たたくて来たわけじゃねーよ。ウサギが泣きまくってウゼーから、しょーがなく来てやったんだよ」
ウサギ……レミリア・キュアフか。なるほど、彼女が頼んだというなら、ガゼルが素直に召集に応じたというのも納得できる話だ。なにせ、すごいからな、彼女。

……それで、そのレミリアは、どこにいるんだ？

「先生。レミイなら先ほど、蝶々を追いかけて出て行きましたよ」

「ほう、ちょーちょ。レミリアは何歳だっけ？」

「私と同じ年ですが」

「うん……ちょっち頭が痛くなってきたかな。まあいいや。よし、探しに行こう。ガゼル、ルーティ、手伝ってくれ」

「やだよ、バーカ。めんどくせえ。死ねボケ、カス」

「ルーティくん、頼む。俺は先に行つてるから」

「わかりました、先生」

につこり笑うルーティくと、しかめっ面のガゼルを残して、俺はオンボロパーティールームの外に出た。

背後から、ルーティとガゼルのやり取りが聞こえる。

「そういうわけで連行しますね」

「あ？ んだテメエ、ふざけてんじゃねーぞゾンビ屋、いい度胸……」

……うおっ、ちょっ、ふ、ふざけんじゃねえっ、やめっ、やめろおお

うっうあああああっ」

「確保ー」

なにが起こっているのか、知りたくない。

ルーティ、ガゼル、そしてレミリア。この三人が、俺の担当するパーティー《リノティア・バーニングボンバーズ》のメンバーだ。いまだ三人しか集まっていない弱小パーティーだけど、必ず一流の冒険者に育て上げてみせる。と、俺は決意を固くしている。

……が、現状、三人目が蝶々を探して行方不明。

お先は真っ暗なのである。とほほ。

〈集合〉

「はい、ようやく集合できましたね！ 予定よりも二時間ほど遅れましたが！」

よかったよかった。

二時間かけてようやく《リノティア・バーニングボンバーズ》最後のひとり、レミリア・キュアフさんを見つけることに成功しました。学園中を走り回るようになりましたが、まあ、衰えたとはいえ、元冒険者なので、この程度のことでは呼吸を乱すということはないのだ。ははは、地獄の訓練を耐え抜いた昔の俺に感謝する。

で、パーティルームに戻ってきました。

適当に三人を座らせて、俺はその前に立つ。

レミリア・キュアフは獣人族……ライカンスロープとか呼ばれる一族が出身の女の子だ。ふわふわと波打つピンク色っぽい銀髪を長く伸ばしていて、綺麗というよりはかわいらしい顔立ち。やたら胸がでかいのにほっそりとした体つき。そして頭の上からは、彼女の最大の特徴、ウサギのそれに酷似した耳が飛び出している。

ライカンスロープは人間と獣が混ざったような容姿と能力を持つ種族。ま、ひとくちにライカンスロープと言ってもいろいろとあって、普段は人間そのものの姿をしていて自在に獣へと変身できる奴とか、レミリアのようにもともとの姿が人間と獣とを合体させたような子だっている。全体的に人間に対して友好的で、親交のある種族なんだが、まだまだ詳しいことが分かっていない。

レミリアは反省しているのか、うつむいてしょぼくれていた。耳も本人の感情の影響を受けて、だらんと垂れている。

「ごめんなさい」

「あー、いいいいいよ。でもこれからは気をつけてね」

「はあい！ 先生は優しいね！ 大好き！」

ぱあっと明るい笑顔を広げるレミリア。耳も元気よく伸びる。

あああああ、いい子だなああああ。なんて素直で純真で素晴らしい子供なんだろう。

思わずこぼれた涙をコートの袖で拭う。

「レミアくんはマジでいい子だよね……先生、感動してきた……うつつつつ、泣けるよ本気で。……いつもいつもサディスティンやら不良のクソガキやらに苦労させられてきたけど、きみのような生徒がいるというだけで俺の人生は報われる……くつつ」

「死ねよノーカン」

「先生、あとでふたりつきりでお話しましょうね？」

「うん、そろそろ本題に入ろうか」

ごほん、と咳払い。ちよつとわざとらしくかったかもしれない。

「えーとね、レミアくんは次回からは気をつけてね。かつちりと時間厳守、五分前行動は基本中の基本。これが守れないと命がいくつあっても足らないよマジで。ダンジョンではちよつとのこととで死に繋がるんだから。……集合時間に五分遅れただけで仲間が腹に剣をブツ刺してきたりさあ」

「嘘つけ。そんなめちゃくちゃな奴がいるかよ」

いいえ、いるんですよガゼルくん。世の中にはね、まだ若いきみの想像などはるかに超越した、めちゃくちゃな鬼リーダーが存在したのですよ。ティーンエイジのトラウマだ。

「いまのは極端な例だけだね。でもそのぐらいのペナルティを背負う覚悟が必要、ってこと。いつも言ってるけど、パーティーにとって大事なものはチームワークだよ。それがちよつと時間に遅れただけで崩れ始めることだってある。わかったかな？」

「はい、先生」

「はい」

返事をしたのはルーティとレミアだけ。

ガゼルくんはそっぽを向いてガン無視である。どうしようこの子。挫折しそう。

肩を落としてため息をつく。くそう、負けるな俺。

「えーと、それじゃあ、本題に入ろうと思う。……きみたち、どうして呼び出されたと思う？」

俺の質問に対して、ガゼルくんは無視。レミリアは首をかしげて考え込むだけ。ルーティが口を開いた。

「いよいよ私に愛の告白を……」

「ちがうちがう。生徒に手を出す趣味はないから」

「では、一昨日の《ロイソス山岳遺跡》での探索失敗が原因ですか？」

「あ、うん、そうなんだけど……いきなり真面目になったなあ……まあ、いいや」

きつとこの場を和ませるためのルーティくんなりの冗句なんだよね、うん。

「んー、俺はルーティくんからちよつと聞いたただけなんだけど、ずいぶんひどいことになったらしいね。失敗した理由をもつと詳しく教えてくれるかな？」

「地下一階でガゼルが猪武者のように独断専行したあげく、見事なまでの無様さでトラップにひっかかって猛毒の霧を発生させました。私とレミイも巻き込まれ、全身を蝕む毒の恐怖と戦いながら、なんとか遺跡から逃げ出すことが出来ましたが、脱出したとたんに三人とも意識を失いました。以上です」

「……ああ、適切で分かりやすい説明だ。ありがとう、ルーティくん」

なにこの問題だらけのパーティー。

まあ、今までたいした対策もできなかった俺にも責任はある。

「で、今回のような失敗を二度と犯さないように、どんなことをすればいいと思う？」

「ガゼルがパーティーから抜ければいいのでは？」

「んだとこの根暗女」

平然と言つてのけるルーティくと、牙を剥いて怒りを燃やすガゼル。

険悪な空気、レミリアはただおろおろとするばかり。

俺は頭痛が痛くて馬から落ちて落馬する。

「まあまあ落ち着きなさい。ルーティ、たしかに今回のことはガゼルの突進が原因だと思うけど、本当の原因はもつと根深いところにあると思うんだよ、俺は」

「根深いところ、といいますと？」

今度はルーティが首をかしげる。

うん、簡単なことなんだ。

「このパーティー、盗賊がないよね」

ガゼルは剣士。

ルーティは屍霊術士。

レミリアは吟遊詩人。

「ちよつとどころじゃなくバランスが悪いんだよなあ。オーソドックスに盗賊と僧侶と魔法使いが欲しいところだね。とくに盗賊と僧侶は必須。……メンバー集めぐらいやろうよ、みんな……」

「興味ねーし」

「忘れてましたあ」

「右に同じく、忘れていました」

駄目だこいつら。どうしよう。

「……よし、今から軽くダンジョンに潜ってこようか」

ま、結局、実戦形式でやってみるのが一番手っ取り早いのである。

「今回は特別に俺が盗賊をやります。もちろん戦闘には参加しないよ。ダンジョン内部や宝箱に仕掛けられたトラップの解除が主な仕事だね。で、盗賊つてすごいなー、仲間にいると便利で嬉しいなー、と実感してもらえるようにがんばります俺」

いわゆる実践販売というやつである。がんばれ俺。

てなわけで作ってきました《ロイソス山岳遺跡》。

地下一階を生徒三人と先生一人の変則パーティーで探索中。

ここはそれほど危険度の高くない、中級者向けのダンジョンだ。黄土色っぽい煉瓦が床や壁に広がる、山の内部に網目のようにして張り巡らされた、かび臭いダンジョン。かつての権力者が財宝を隠すために建築させたと言われているが、もう発見からかなりの年月が経っているため、めばしいお宝は奪いつくされていて、いまでは魔物が徘徊するだけの寂しい場所だ。

この最下層は地下二十階。挑戦可能レベルは九〇。《リノティア・バーニングボンバーズ》のメンバーは全員が挑戦条件をクリアしている、が、そういえば詳しいレベルは把握してなかったな。

先行している俺は、後ろを振り返って訊いてみる。

「きみら、レベルいくつだった？」

「一八〇」

と、ガゼル。

「一二〇です」

と、レミリア。

「一九〇です」

と、ルーティくん。

「あれ？ ルーティは一七〇じゃなかった？」

「はい。あのあと調べたら一気に上がっていて驚きました」
ええええ？

たった一度の探索で二〇も上がるものなのか？

たしかにあのとき出会った魔物どもは強敵揃いだっだし、最後に倒した吸血鬼野郎は手ごわかった。たくさん経験を積んだらうとは思う。けど、それにしたって上昇率が半端じゃないだろ……。普通は何度も迷宮に出入りしてやっと一か二ほど上がるかどうかって話

なのに。この子、マーキアス先生が見いだしただけではあつて、とんでもない可能性を秘めているのかもしれない。

で、「ルーティちゃんすごいすごーい」と飛び跳ねて喜んでるのがレミリア、眉間に皺を寄せて不機嫌そうになったのがガゼル。

「ああ？ てめえ、いつの間にそんなにレベル上げやがった？」

「あなたが惰眠を貪っているうちによ、ガゼル」

自慢げに鼻を鳴らすルーティくと、歯噛みして睨みつけるガゼル。なんでこんなに不仲なのこの子たち。

おっと。

「はい、ちよつと止まって」

後ろについてきている三人を、手で制止。

「ガゼルくんがひっかかったトラップつて、これのこと？」

前方の床の一部、ちよつと盛り上がっている煉瓦を指差す。

ルーティがうなずいた。

「でも、以前と少し場所が違うような」

「こつというのは一部の賢い魔物が仕掛け直したりするからね。でないとダンジョンのトラップなんてすぐになくなっちゃうよ」

「なるほど」

「うん、でもこれはあからさまだから簡単に避けて通れるね。厄介なのは、わざとこつしておいて、避けたほうに仕掛けてあるトラップなんだけど……ま、今回はなさそうだ」

しかし、よっぽど猪突猛進に突き進んでいないとひっかからないぞ、これ。

どんだけ猪武者やっちゃったのよガゼルくん。

「ていうかもしかして、完全に初心者と同じなんじゃないか、きみら？ レベルとかそういう話じゃなくて、ダンジョン初心者」

レベルの高さだけでダンジョンを踏破できるものでもない。

実際の探索中には、それに加えて、踏んできた場数 体に叩き込んで覚えた経験こそがものを言う。

この子ら、レベルはそれなりに高いし、戦闘能力もあるのに、なん

というか、振る舞いが入学したてのヒヨツ子とそう変わらない。ずぶの素人も同然なのである。

「私は、最近までずっとマスター・ゾルディアスのお手伝いをしていただけでしたから……正直に言くと、迷宮の探索には不慣れです」「あたしはダンジョンが苦手だからあんまり入ったことない……怖いもん」

「クソめんどくせえ。とりあえず出てきた敵をぶった切ってりゃいいんだろーが」

うーん、ルーティとレミアはともかく、ガゼルがやばいことになっていきます。

「ガゼル……いいパーティーに恵まれたな」

「あ？」

「昔ね、同じようなことをほざいて、直後に頭をかち割られた剣士がいたんだ」

傷痕が残ってハゲにならずにすんだのは本当に幸運としか言いようがありません。

かわいい生徒が同じような羽目に陥らないように、いまからきちんと教育する必要がある。

「戦闘中はともかく、探索中は、先走るのはやめなさいね。そういうのは盗賊とか狩人とか、身軽さが売りの奴らの仕事。剣士は攻撃力もあるけど防御力もある。奇襲があつたときに体力の低い後衛職を守るのは、頑丈な前衛職の仕事なんだ。おまえがあんまり隊列から離れて先行していると、後ろの奴らが無防備になるだろ？」

「ふん。自分の身を自分で守れない奴らが悪いんだよ」

むう……この子、いつか死ぬぞ。
子供が死ぬ それも自分の生徒が迷宮で命を落とすだなんて、絶対にごめんだ。

早いところガゼルの反抗期の原因を見つけて対処しないと、本当にまずいことになる。

と、大きな十字路に行き着いたところでわずかな物音に気づいた。

背中から壁に張り付く。

「はい、静かにして。ゆっくりこっちに来て」
小声で言いながら、ちよいちよいと手招き。

怪訝な顔の三人を連れてそろりそろりと移動。

来た道から見て右側、俺の背中が向いてる方向の通路から、生き物の気配が近づいてくる。

「まだこっちに気づいてないと思う。魔物……五体から六体かな。

あんまり強くなさそうだし警戒もしてない。不意打ちできると思うから俺の合図で奇襲してみて」

「なんでそんなことまで分かるんだよ？」

「敵意のある足音と匂いがしないからね」

「は？ 匂い？」

「うん。警戒してる生き物は発汗するから酸っぱい匂いがするんだよ。さて、十五秒後に接触だ。用意はいいかな？」

なぜか不満げな顔のガゼルが剣を構えて、ルーティが静かに目を閉じて詠唱を開始、そしてレミリアは取り出した横笛、フルートを口に当てる。

十秒が経った。

さて、どんなものかな、この子らの实力は。ルーティのことは先日の共闘でよく知ったけど、ガゼルとレミリアはあまり分からない。どっこいしょ、と、近くにあった瓦礫に腰掛ける。

最初に言った通り、俺は戦闘に参加するつもりはない。よっぽどまじいことになったら撤退の手助けぐらいはするつもりだが。冷たい態度と言っなけれ……こうしてついてきただけでもかなりの過保護、普通はやらないことだ。

ま、彼らの実力をじっくりと見させてもらおう。がんばりなさい。まず始めに飛び出したのはガゼル。

刃渡り二メートルの凶刃が、唸りを上げて魔物の頭部に食らいつく。突然の奇襲にまったく対応できず脳味噌を撒き散らしたのは、レッドキャップという魔物だった。真っ赤な頭髪が赤い帽子のように見

えることからそう呼ばれる、子供ほどの背丈しかない小柄な老人のような姿をした魔物だ。小さな手斧や短剣などで武装していて、よく徒党を組み、集団で獲物に襲いかかって鬺り殺しにする。残虐な性格の持ち主だ。

さて、まずは奇襲成功といったところかな。ここから相手が態勢を立て直すまでに、どれだけの数を仕留められるか。

残り四体のレッドキャップ。

おっと……それと、一体のレッサーオーガ、か。身長二メートル、肥満しているようにも見える体は筋肉の塊。伸ばし放題の髪と凶悪な光を放つ双眸、黄ばんだ乱杭歯。見た目どおりの馬鹿力が自慢で、棍棒やら長剣やらを振り回す。見たところ、あいつがレッドキャップたちのリーダー格だな。

一体目のレッドキャップを切り裂いたガゼルは、返す剣でもう一体、胴体を撫で斬りにして始末した。

レッサーオーガやレッドキャップたちの動揺した気配。

そのとき響き渡ったのは、レミアアのフルートが奏でる澄んだ音だった。こんな迷宮で聞くには場違いとさえ思える、耳に心地いい旋律。吟遊詩人が得意とする魔法の音楽、呪歌だ。歌を歌ったり楽器を演奏したりして、周囲に魔法の影響を及ぼす。この流れるような旋律は、聴く者の精神を高揚させ、戦闘能力を高める効果を持っているはずだ。

魔物どもがようやく動揺から立ち直り、完全に敵意を剥きだしにして武器を構え始めた。

が、遅すぎる。

すでにあちらの数はレッドキャップが三体……いや、いまもう一体殺されたから二体か。それとレッサーオーガ一体。ふむ、数の上ではこっちの圧勝。なにせ、ルーティが準備を終えたからな。

杖を地面に突き刺したルーティを中心として、真紅の魔方阵が浮かび上がる。そこからぞろぞろと這い出てきたのは十体以上もの動く骸骨……屍霊術士ルーティの忠実なしもべ、スケルトンだ。人間の

死体から作り出された骨だけの戦士。もっとも代表的なアンデッドモンスターのひとつ。それぞれが剣や盾で武装している。

こういうとき、あのキメラミノタウロスでも使えば、このダンジョンでうろついている魔物どもなんぞ瞬殺なんだろうけど。あいにくと吸血鬼野郎に解体されてしまったので、今はこうして質よりも量に頼るしかないのだとか。

ガゼルの舌打ち。

「気色の悪いもん呼び出すんじゃねーよ」

「あなたもその下品な太刀筋をどうにかしてください。本物の戦士は、」

ルーティめがけて飛び掛ってきたレッドキャップを、一体のスケルトンが迎え撃った。血まみれの手斧の一撃を盾で防御し、あえて身を引いてレッドキャップの体制を崩したところで、その首筋を剣で一閃。鮮やかな手際だ。

「ほら、こうして洗練された動きで戦うものです」

ふふん、と鼻を鳴らして薄い胸を張るルーティくん。

ううむ、あのスケルトン、俺ですら唸るほどの滑らかな動きをする。アンデッドの性能は、呼び出した屍霊術士の實力によるからな。さすがルーティ、いい仕事だ。

ま、レッドキャップごときなら、ガゼルたちの相手にはならんだろう。う。

問題はレッサーオーガか。それでもさほど手間はかからないとは思っただけ。

と思っていたら、いきなり気合いの声を上げたガゼルがレッサーオーガにとびかかって一刀両断にしていた。おお、すごい。華奢なダークエルフとは思えないほどの膂力だ。

「悪いが、お上品な剣技なんぞ知らねえんだよ」

吐き捨てるように言うガゼル。

残ったレッドキャップたちは、すでにスケルトンが排除していた。ふむふむ、この程度の魔物たちは相手にならない、と。やっぱり戦

闘力はあるんだよね、この子たち。

「みんなすごいねー。あたし、ぜんぜん活躍できなかったよー」
ここにこ笑いながら言うレミリア。

「レミイはいいのよ、戦わなくても。怪我をしないように気をつけてね」

あれ、そんな優しそうな顔とかできるんだ、ルーティくん。まるで普通に優しい女の子のようです。

「先生、いまなにか失礼なことでも思っていますでしたか？」

「えっ、いやいやなんにも？ あ、みんなお疲れさん。がんばったね、えらいえらい」

よっこいしょー、と立ち上がる。

「だいたい分かった。個人の能力は高いよね、やっぱり。レミリアはちよつと分からないけど、まあ、吟遊詩人つてのは基本的に仲間の補助が役割だしね。いまのは手の出しようもない戦いだっただし仕方ないよ。で、ガゼルはやっぱりちよつと突っ込みすぎ、もうちよい周りをよく見よう。ルーティはもっと積極的に攻めてもいいかなあとガゼルをアシストしてあげて。よし、それじゃあ以上の点を反省した上で、ちやつちやつ次に行こうか」

と、その前に、もうひとつ仕事があった。

「おつと。モンスターの群れは宝箱を落としていった」

「先生？」

「いや、ごめんねルーティくん。ちよつと試みてみたかっただけ。

で、全員注目してください。ここに宝箱があります」

たぶんレッサーオーガが落としたんだろう。なにやら小汚い箱が床にある。

「普通に開けてもいいんだけど、罠が仕掛けられているかもしれない。猛毒のガスとか石弓、爆弾とかあると困るよね。で、こんな場合、安全に中身を手に入れたいとき、盗賊技能を持つメンバーが必須になってくるのです。具体的には盗賊、狩人、忍者だね。先生としてはやはり専門職の盗賊をおススメするけど、狩人や忍者も捨て

「がたいかなー」

「……で？ 開けるならさっさと開けるよ」

「おお、容赦ないねガゼルくん。いや開ける、開けるんだけどね」

んー、でもちよつとした問題がひとつある。

俺は、俺たちの背後に振り返った。そこにあるのは迷宮の石壁。

「見学したいなら構わないよ。そんなとこにいないで、もうちよっこつち寄ってみ」

「あ？」

「は？」

「へ？」

「……失礼……いつから気づいていました……？」

ぬるっ、とした動きで、壁の向こうから浮かび上がるようにして現れたのは、黒装束を纏った少年だった。たぶんルーティたちよりもひとつかふたつ年上。背丈は俺と同じくらいあるだろう。その代わりずいぶんとやせ細っていて、華奢だ。長い手足。びっくりするほどの美形。透き通るような色白、すっきりとした鼻筋、睫毛が長くて女っぽい。どこか虚ろな瞳の色は黒く、べったりと重そうな髪もまた黒い。その整いすぎているほど整っている容姿と、特徴的な長い耳……エルフ族か。黒髪黒瞳のエルフというのも珍しいな。

《忍者》

「……気配は……完璧に消していたはずでしたが……」

「完璧だったよー。でも完璧すぎたかな。初心者がやりがちなミスなんだけどね、あんまり完璧に気配を消すと、そこだけぽっかりと不自然に空っぽの空間が出来上がるんだ。だから本当に身を隠したいなら、空気にならないとね」

「……はあ」

周囲との一体化、これが簡単なようで難しいのである。

「で、きみ、だれ？ リノティアの生徒だよな？ 俺は用務員のアキヒコ・シキムラ」

「……高等部二年の……ノアル・ハーミットです」

「そっか。忍者？」

「一応……」

なんだかずいぶんと暗い子だけど、大丈夫だろうか。具合が悪いというわけでもなさそうだけど。

忍者はここからはるか東方の国を出身とする職業で、まあ、ほとんど俺のもとした世界の忍者と変わりない。得意とするのは気配を絶つての隠密行動、周囲の警戒と奇襲の防止、そして暗殺。裏方だけと重要な役割を担う職種だ。

「で、なんで隠れてこつちを見てたの？」

「……みなさんをたまたま見つけて……それで……勉強をしたいと思っまして……」

「畏の解除の？」

「……はい」

こくりと頷くノアルくん。見たいならそう言えばいいだけなのに。シャイな子なんだろうか。

「それはもちろん全然かまわないんだけど、仲間はどうしたの？ まさかひとり？」

と訊くと、目に見えてノアルくんの様子がおかしくなかった。

なんというか、マジで自殺する五秒前。そんな感じ。どんよりと黒い負のオーラが立ち昇っている。

「ど、どつたの」

「仲間は……いません……」

「え、なんで？」

「……あれは、先週のことでした」

以下、ノアルくんの事情。

先週までとあるパーティーに所属していたノアルくん。忍者としてパーティーの役に立つよう努力し、がんばってきた。みんな優秀で、けっこう勢いに乗っていたらしい。その日もダンジョンの奥底にまで潜ったのだという。

現れた強敵。

奮闘するメンバーたち。もちろんノアルも精一杯の力を出して戦う。そして勝利。

いままでにない強敵を倒したことにより喜ぶ一同。

落ちていた宝箱に気づく。

どんな素晴らしい中身が入っているのだろうか？ 全員、興奮が止まらない。

メンバーの中で唯一、トラップを解除できる、ノアルが宝箱に挑戦。罾の解除に失敗。どころか、石弓だと思っていたら爆弾だった。

ドカンと見事に爆発した宝箱。その爆風はメンバーを残らず吹き飛ばし、体力の低い後衛職の連中に瀕死の重傷を与え、爆弾の近くにいたノアル自身もかなりひどい怪我を負った。そこからはもう必死になって命からがら脱出してきた、と。生きて地上に帰れたただけでも奇跡だな。

「……幸い、怪我は治りましたが……」

「あー、パーティーから外されちゃったのか」

「はい……」

まあ、そのパーティーの子らの気持ちは分からなくてもないけど、ね。

信頼していたのに裏切られた、って気分なのだろう。不幸中の幸い
とでも言うべきか死者は出なかったそうだけど、だからといって当
事者たちにとっては簡単に許せるようなものでもないだろうし。

「で、二度と失敗しないように特訓してた、と?」

「はい。……このあたりの魔物なら、僕でも簡単に倒せますから…
…」

たしかに、ノアルは強そうだ。レベルにして二〇〇そこそこ? こ
のダンジョンの魔物ならば容易に倒せるだろう。ひとりでうるつい
ていてもさして怖くないはずだ。安心して罫の解除の特訓に励める
わけか。

「ふーん、だいたい事情は分かった。いいよ、見学してて。それで、
できればうちのパーティーに参加してくれると嬉しいなあ。メンバ
ーが足りてないんだよね。ちょうど盗賊とか忍者とか探してるとこ
ろだったし」

「……いえ、それは……ちょっと。……もとのパーティーに帰りたい
なので……」

「あー、そっか。だよな。うん、ごめん。ま、無理強いはしないし、
できないよ」

なかなか、そう簡単にはいかないもんだよなあ。

どうしようかなあ、メンバー集め。どうしても盗賊技能の持ち主が
欲しいんだけど。トラップ解除も出来ないのにダンジョン突入とか、
後ろ向きな自殺願みみたいなもんだし。

ま、それは置いといて、いよいよ宝箱を開けてみますか。

扉をノックするように、箱の表面を拳でコンコンと叩いてみる。

やっぱり爆弾か。ま、このタイプなら、ちゃっっちゃと急げば問題な
いね。

はい、パカッと開けて

開ける前に声をかけられた。

「あ、あの……」

「ん?」

「もう開けるんですか？　ちゃんと調べてからじゃないと……」
振り返ってみると、ノアルが怯えたような表情を浮かべて俺を見ていた。

あれ、なんか変なことやったかな、俺？

「せめて罨の有無と種類くらいは把握しないと……」

「爆弾だね。旧式だから急いで解除すれば大丈夫、準備はいら
ないよ」

罨の種類は宝箱に近づけばだいたい分かる。触るのは最終確認のため。

「……どうして分かるんですか？」

「味だよ。ほら、甘い味がするでしょ？　昔の爆発物は味が特徴的だからすぐ分かる。あと匂いだね。なんかツンとした柑橘系の」

「えっ」

「えっ？」

「……あの、先生、味って？」

「いや、だから、味だよ。爆弾が近くにあると空気の味が変わるでしょ？」

「えっ」

「えっ？」

なにそれ怖い。あれ、俺がおかしいの？　なんでノアルもガゼルたち三人も俺のことを異星人でも見るみたいに見るの？　なんか変なことでもやったの、俺？

いや、そういえばこんな目で見られたことが過去に何度かあったよ
うな。

謎である。

「えっと、ほら、砂糖は甘いだろ？」

「……はい、もちろん」

「うん。爆弾も同じなんだ。だから分かるんだよ。でも最新式のはちよっと苦味がある種類が多いかな。実際に手に入れていろいろ舐めてみるといいよ。この味の火薬は二百年も昔にラザニア帝国のバ

ウルマンが発明したやつでね、味と匂いにクセがある」
で、もう一度、宝箱をコンコンとノック。

「叩くでしょ。音がするでしょ。で、中の様子が分かる。ほら、野菜とか果物とか選ぶときに叩いたりするだろ？ あれと同じ。な？
簡単だ」

にっこり笑う俺。

呆れた顔の皆さん。なんで？

なんだかちよつと居心地が悪い。

「そ、それでな、開けるんだよ」

ついに開帳、針金を鍵穴に突っ込んでひねってパカッと蓋を開けて蓋から箱の底に伸びてる細い糸を指先で切って端っこを持ちつつ、その糸が繋がっている筒状の物体をそつと持ち上げる。

「はい解除成功。爆弾だ。衝撃を与えても滅多なことじゃあ爆発しないけど、この糸を引っ張るとドカンといくね。派手なクラッカーみたいなもんだ。水につけると無力化できるよ」

コートの内側から水筒を取り出して、口で蓋を外し、中身の水を爆弾にかける。

無力化した危険物をポイツと捨てる。二度と爆発しないから、もう安心だ。

「これでおしまい。安全に宝物を手に入れられるというわけよ。…

…ああ、銅貨が十枚と銀貨が一枚か、シケてるな……」

ま、子供らの小遣いの足しにはなるだろ。

「……先生」

「ん？」

なぜか俺を見つめるノアルくん。

「弟子にしてください」

えっ、なにそれ怖い。

〈新たな仲間。そして水着のお話〉

「それじゃあ、本当にうちの子らのパーティーに参加してくれるんだ？」

「……はい。先生の弟子になれるのでしたら」

「うーん、弟子とかよく分からないけど、俺なんかでよければ教えられることは教えるよ」

「……よかった。先生ほどの盗賊の技を教えていただけるとは……嬉しいです」

いや俺は盗賊じゃなくて剣士なんだけど、一応は。

ま、そんなこんなで、なにやら無事に盗賊をメンバーに入れることができたようです。よかった、安心したぞ俺は。これでうちのパーティーが悪辣なトラップにひっかかって全滅するという心配も、ずいぶんと和らいだ。

全員それぞれの自己紹介もすませたし、こうしてダンジョンを歩く足取りも、ずいぶんと軽く

「待てよ」

「ん？ どしたの、ガゼル？」

「俺はまだそいつと組むと認めたわけじゃねーぞ」

敵意に満ちた目でノアルを睨みつける、ガゼル。

めちゃくちゃ不機嫌そう。なんで？

「エルフと仲良しごっこなんぞやれるかよ。胸糞悪い」

「なんで？ ガゼルもエルフだろ」

と言った瞬間、俺の鼻先に剣の切っ先が突きつけられていた。

今度は俺を睨みつけるガゼルの目には、明確な殺意が灯っている。

「俺は誇り高いダークエルフだ。人間や、エルフみたいな、弱くて薄汚い連中といっしょにするな。分かったかクソ野郎。殺されたくないかったら、二度と間違えるんじゃないやねえぞ」

うげげげ……この子、怖い。

かつてこれほどまでに俺に対して敵意をむき出しにした生徒がいたでしょうか？ いやいません。

ま、エルフとダークエルフの関係が破滅的に悪いってことを忘れていた俺が悪いわな、いまのは。

素直に両手を挙げて降参する。

「ごめんな。気に障るようなこと言っちゃったみたいだ」

「ああ。分かればいいんだよ。次は殺すからな」

マジで殺されそうな気配がビンビンします。うう胃が痛い。

そしてルーティくん、スケルトンを召喚する必要はないよ。と、視線で合図。

「……んー、ノアルくん、こういう状況なんだけど……きみは大丈夫？」

「僕は……問題ありません……ダークエルフに対して想うところはありませんし。ある程度の距離を保てばいいのでは……？ その彼が、どうしても我慢できないというのであれば……残念ながら、無理に参加することはできませんけど……」

「どうしても我慢ならねーな。クソエルフと同じ空気を吸うと思うだけでうんざりする」

「……いい加減にしてほしいわね。お子さまのわがままにこそうんざりさせられるわ」

ため息をつき、指で眼鏡の位置を整えながら言ったのはルーティだった。

なんだか険悪なムード。喧嘩の予感。

「あ？ なんだと、根暗女」

「このパーティーはあなたのための玩具ではないし、私とレミィはあなたの不手際に巻き込まれて死ぬつもりはない、ということよ。ハーミット先輩と組むのが嫌なのであれば、あなたのほうこそ出て行ったら？ あなたよりも先輩のほうがずっと頼りになりそうだもの。もつとも、出て行ったところで、もうあなたを仲間に加えるパーティーなんて、この学園には存在しないでしょうけど」

ガゼルの怒りが燃え盛る炎のようだとすれば、ルーティのそれは絶対零度の氷塊のようだった。思わずこっちまで凍える視線。いかな、本気で怒ったルーティは怖いんだぞマジで。俺ですら泣きたくなる。

なので、怯むこともなく大剣の柄に手をかけたガゼルの胆力は凄まじい。と思う。

「いつぺん死ぬか……？」

「あら。どちらが死ぬことになるか試してみる？ 言っておくけどあなたの死体はこの場に捨てておくわよ。再利用する価値もなさそうなもの」

「や、やめようよ、ガゼルくんも、ルーティも……」

一触即発の空気、おろおろするレミア、困った表情のノアル。やれやれ……生徒たちのパーティーの問題だから、本来なら俺がむやみに口出しすべきことじゃないんだが、担当官としてちよつとフオローしとかなないといけないかな。

「はいはい、喧嘩はやめなさいね。ダンジョンの内部でパーティー分裂とか、きみらはよっぽど死にたいのか？ 仲間は大切にしよう。チームワークが大事だよ。チームワークが大事だよ。とても重要なことだから二回言っておくね」

「あ？ 弱っちい人間のくせに指図するんじゃないやねえぞ、この」

「ガゼル。本当に、本気で、大切なことなんだ。よく聞いてくれ。あのな、ここでは人が死ぬんだよ、本当に。ちよつとしたことで死ぬんだ。トラップに引っかけたり、魔物に殺されたりして、うちの生徒たちは毎日のように死傷者を出している。とても危険な場所なんだよ」

「だから、なんだ？ エルフと仲良しになれってか？ 反吐が出るな」

「うん。反吐が出たとしても死ぬよりはマシだろ？」

ちよつとぐらい仲が悪かったとしても、そんなもの、長いこと組んでいればやがて解決するはずの問題さ。だと思いたい。

でも、なにが不満なのか、激しく舌打ちするガゼル。

「ああ、分かったよ。じゃあ、こうしろ。そのエルフが俺と戦って勝ったなら、喜んでパーティーに入れてやる」

そんなにノアルくと仲間になるのが嫌なのだろうか。ダークエルフとエルフの仲が険悪なのは誰でも知ってることだけれども、ガゼルの人間嫌い、エルフ嫌いは、もはや病気の段階だな。どうやって更正させればいいのか。

……ふーむ、こうなると、ノアルがどうするのか……。

「きみがそれで納得するなら……僕はかまわない……」

相変わらず虚ろな視線をさ迷わせているノアルくん。覇気とか戦意とかとは無縁の子だな。まるで真冬の湖面のごとし。恐ろしいまでに静かな気配だ。……強いな、この子。よく鍛錬している。

先生としてはいろいろと迷うところがある場面だが、仕方ないや。

どうあつても盗賊は欲しいし。

「しょうがないなー、もう。んじゃ、俺が止めるか、どっちかが参ったというまでやりあってね。三分以内にすませること。では始め」

と言った瞬間に剣の柄に手をかけたガゼルの腹部を、瞬時にして間合いを詰めたノアルの手刀が深く抉っていた。

「っ……あ……っ」

浮き上がるガゼルの身体。つま先が地から離れる。悶絶するガゼルの瞳は白黒と明滅しながら涙を浮かべ、ぱくぱくと開閉を繰り返す口の端からは涎が垂れ、身体全体が痙攣している。

忍者にとつて最大の武器とは、手裏剣やらくないやらではなく、恐ろしいまでに鍛え上げたおのれの肉体そのものだ。極めれば五指で鋼鉄を引き裂き、足刀で敵の首を刈り取る。ノアルはまだ未熟だけど、その瞬発力がガゼルの反応を上回り、指先が彼の薄い皮鎧ごと褐色の腹筋をたやすく破ったとしても、なんら不思議ではない。

「はい、そこまで。勝者、ノアルくん」

「……どうも」

俺に向かってぺこりと頭を下げる、ノアル。

害できる武器なのだ。

なんというガン泣き。ダンジョン内部が空気の振動でビリビリと震え、足元が揺れる。天井からパラパラと埃やら小石つばいものやらが落ちてきた。

両手で耳を塞いでみても気休め程度にしかならない。ガードを無視して容赦なくこっちの脳味噌を殴打してくる音波の暴力。

「ううえええ、え、えええああああああ、あ、あ、っつ」

天を向いて号泣するレミアの調子は絶好調。竜族の咆哮ですらこままでのものは聞いたことがない。

いかん。なんか本気で死にそう。吐き気とか目まいがマジやばい。足がふらつく。というかすでに一歩も動けそうにない。

ルーティは耳を塞ぎながらうずくまっついて、ノアルくんも同様だ。あ、走馬灯とか見えてきた。《黄金の栄光》に参加した当時、最初にダンジョンに連れて行ってもらったときのことを思い出す。腹を剣でめちやくちやに挟られたあげく、ダンジョンの入り口付近で置き去りにされたときのことだ。死ぬかと思った。いまも死にそう。生徒の泣き声で人生終了とか、本気かよ神さま……。

と、俺がちよつと諦めかけていたとき、泣き声がピタリとやんだ。きよとんとした顔のレミア。その肩に手を置く、息も絶え絶えといった様子のガゼル。

「ほえ？ ガゼルくん……生きてたの……？」

「勝手に殺すな、バカ。くそっ、最悪の目覚めだ」

咳き込みながら吐き捨てる。

どうやら、ようやく命の危機は去ったようだ。

俺は安心して全身の力を抜き、ため息を深くついた。

「生徒の泣き声で死ぬとか洒落にもならんよ」

「ごめんなさい……」

「いやいや怒ってるわけじゃないんだよ？ ねっ、泣かないでね、うん」

また泣かれたら今度こそ生きていられる自信がないからなあ。

「ところで、勝負はノアルくんの勝ちなわけだけど、さすがにもうガゼルも文句は言わないよな？」
いちおう、確認してみる。

ガゼルはそっぽを向いて激しく舌打ちしながら、
「クソが。約束は守ってやるよ。俺はエルフや人間とは違うからな」
まあ、とりあえず承知してくれたのだからよしとするかな。パーティーとしていつしよに長く組んでいけば、そのうち仲良くなったりもするでしょ、たぶん。たぶんね。きつと。

「……では……よろしく願いますよ……」

「うんっ、あたし嬉しいなっ、メンバーが増えてすごく嬉しいっ！」

「ええ、よろしく願います、先輩。ようこそ、《リノティア・バーニングボンバース》へ」

「うん……それが、このパーティーの名前なんだ……？」

あ、それ訊いちや駄目だよ。と俺が言おうとしたのは、どうやら遅かったようだ。

よくぞ訊いてくれました、とばかりに薄い胸を張るルーティくん。
あれ、なぜだか目から汗が出るよ。

「はい！ 私が三日三晩かけて考えた名前です。私、こつ見えても命名することに関しては自信があります。まずは文字の画数や語呂などの基本的な部分から考慮し、さらに私の好みとしてクールで可憐、それでいてどこかけな気な、そう、雪原に咲いた一輪の花をイメージして名づけた自信作なんです！」

なん……だと……？ 雪原に咲いた一輪の花……？ ならばバーニングボンバースというのはいったい……。

「そう……クールだね」

いや。きみのほうがクールだと思うよ、ノアルくん。すごいな。まさに雪原に咲いた一輪の花。ガゼルと同じく女の子みたいな美貌だから、なんだかものすごく格好よくて羨ましい。いいなあ。

「俺からもお礼を言わせてもらうよ、ノアル。ありがとう。正直な話、メンバーがぜんぜん足りなくて困ってたんだ。盗賊も魔法使

いも僧侶もいないんだからね。これでようやく一步前進って感じかな。あとは、まあ、回復係と攻撃係をひとりずつってところかな」

「まだまだ仲間が増えるんだよね？ 楽しみだよー」

さつきまで目を泣き腫らしていたレミリアだけど、もうすっかり元気になって、嬉しそうにほほ笑んでいる。うんうん、いい子だ。

「まだまだ未完成なパーティーだけどさ、これからがんばっていけばいくらでも成功していけるから、ノアルも協力してやってよ」

「はい……もちろん」

「うん、ありがと。で、このパーティーのことなんだけど、一応、リーダーはルーティってことになってる。詳しいことは彼女から聞いてね。でもって、うちのパーティーでは基本的にメンバーの自由意志を尊重しているんだけど、俺が作った約束……守って欲しい決まりごとが三つあるんだ」

「……なんでしょうか」

真剣に俺の話聞いてくれるノアルの姿を見て、俺は不覚にも泣きたくなった。そう、これだよこれ。俺はこういう生徒を待っていたんだよ。ガゼルはぜんぜんこっちの話を聞いてくれないし、ルーティはなにかにつけて俺を苛めるし、レミリアはぼやんとしていて集中していないことが多いし。素晴らしすぎて感涙しそうです俺。涙を堪えて、まずは人差し指を立てる。

「まず、ひとつ。仲間割れは禁止。理由は言うまでもないよね」

つぎに、中指を立てる。

「ふたつ。ダンジョンではリーダーの言うことをよく聞いて、いつでも慎重に行動すること」

いや、守られてない規則なんだけどさあ。はあ。ま、これからはそんなこともなくなってくれと信じているよ俺は。うん。

で、三つ目だ。薬指を立てる。

「みつつ。水着を着用してのミーティングは禁止」

「えっ」

「……うん、その反応はよく分かる。すごくよく分かるんだ。でも

大事なことだからよく聞いてほしい。こんな決まりごとを作ったのは、俺がリノティアの生徒だったころの経験が原因なのさ」

「いま思い出しても恐怖のあまり身が凍る、あのおぞましい毎日……。暑の日。事件のきっかけを作ったのは、当時の俺たちのパーティーのリーダーだった」

回想スタート。

『いやっほーう、みんな集まったかなー？ ミーティングを始めるよーっ！』

『遅いわよ、フェアライト。珍しいわね、あなたが遅刻すぶうっうっ！？』

『なんだよ、汚いぞ、ユーフィーナ。唾を飛ばすな。だいたい遅刻はしてねえ……。まだ五分前だ』

『ちよっ、ちがつ、なにその格好……。！？』

『水着を着てみました』

『見れば分かるわよそんなのっ！ 私が訊いているのは、なんで部屋の中で水着なのかってことよ！』

『暑いので』

『だっ、だからってそんなっ、ひ、卑猥な……。それっ、ほとんど紐じゃないっ、紐っ！ 正気！？』

『いいだろー、ビキニだぜー。エロくて涼しくて、俺の美貌を最大限まで活かして、そのうえ長いこと着替える必要もない……。どうしてこんな素晴らしい衣装の存在に気づかなかっただらうな？ ふふふ、俺としたことが迂闊だったぜ』

『ま、まさかあなた、その格好で学園内をうろついていたりしないわよねっ？』

『うん。マーキアスのところに用事があったからな、ちよっと思ってきた。学園中の注目を独占できて気分そう快だったぞ。そっぴや風紀委員の連中が顔色を変えて追いかけてきたが、まさに俺の美しさは罪といったところか……。あはははは』

『馬鹿じゃないの!? 馬鹿じゃないの!? 馬鹿じゃないの!? 馬鹿じゃないの!? へっ、変態っ、変態っ、破廉恥っ! ち、痴女そのものじゃないの……!』

『エロかわいいと呼べ。もしくはエロかつこいい、エロ美しいでも可。ま、なにはともあれミーティングを開始するぞ。全員、着席。』

……あー、それにしても胸の谷間が蒸れて気持ち悪いな……ちよつと風に当てたほうがいいな』

『アキくん、見ちゃダメえええええっ!』

『さつきからうるせーぞ、ユーフィーナ。見る、ほかの連中を。シエラザードはいつものごとく読書中だ。その本を閉じる、燃やすぞ。ウィルダネス、鼻くそをほじくるな。手を洗ってこい。ジエラルド、ちらちらとこつちを見るぐらいなら堂々と触りにこい。アキヒコ、おまえはもうちよつとこつちを見る。注目されないつまらんだらうが』

回想終了。

などということがあったのです。

「頭がおかしいんじゃないのか、その女」

「うん……じつに的確な突っ込みだよ、ガゼルくん。素晴らしい。

でもね、本当の恐怖はそこではなく、その一年後。次の年の夏に始まったんだ」

再び回想スタート。

『よーし、全員きちんと集まったな? では今日も今日とてミーティングを ちよつと待て』

『……な、なによ、フェアライト……どうかしたの?』

『まったくだな。どうした? はやくミーティングを開始しよう』

『いや、それはもちろんだが……どうして、おまえらまで水着なんだ? しかもビキニ』

『おまえが始めたことだろう。去年のおまえが涼しそうだったのを思い出してな、私も真似してみようと思ったのだ』

『そ、そうよ……わ、私だって、す、涼しいほうが気持ちいいもの

……な、なかなか快適でいいわねこれはっ！ あ、あははははっ……
……っく、う、ふぐうっ……」

『泣くほど恥ずかしいなら最初から着るなっ！ つーか、おまえらふたりに挟まれてるアキヒコのほうがよっぽど恥ずかしそうだぞ。』

大丈夫かおまえ。顔が真っ赤なんだが』

『本当だな。大変だ。熱でもあるのか？ どれ、私が測ってやろう』

『ああっ、シエラガード、ずるいわよっ！ ね、アキくん、私が測ってあげるから、こっち向いて？』

『……おまえら……ちよっとは真面目にやらないと殺すよ……？』
回想終了。

「地獄でした。俺はもう目にやり場に困ってミーティングどころじやなかったし、女性陣は騒ぎまくるし、喧嘩し始めるし、男のひとりには鼻くそほじってるし、ひとりには鼻血とか脂汗とか垂れ流してぶっ倒れるし、もうあれはミーティングでもなんでもありませんでした」

まさに地獄でした。

もう、ダンジョンの探索とか、冒険とか、そういう場合にはありませんでした。

「……大変でしたね……」

「分かってくれるか、ノアルくん。やつぱりきみは賢くていい子だ」

「はい。水着は禁止……よく分かりました」

「うんうん、その通り」

「……今年の夏には消してしまう規則ですけどね」

にやりと笑うルーティくん。えっ、なんで俺の背中に寒気？

十年前のお話 〈黄金の栄光〉（前書き）

このお話では秋彦が異世界にやってきた当初、十年前の出来事を語ることになりました

語り手は秋彦ではありません

この物語におけるもう一人の主人公とでもいうべき人物です

秋彦が語る現代編とは違い、かなりバイオレンスで容赦がありません
きついと感じる読者さんもいらっしゃるでしょう

ですがこの過去編があつてこそ秋彦の現代がありますので、どうぞ
お読みになってくださいな

十年前のお話 〈黄金の栄光〉

まったくこの世は地獄だな。いいことなんてひとつもないぜ。

俺は舌打ちしながら、左腕で握った短杖《狂える魔導士の背骨》を振った。高位の魔法使いにしか扱えないレアアイテム。呪文を唱えれば、杖の先から巨大な火の玉が飛び出す。それは俺めがけてすつとんできていた殺人氷柱とぶつかり合い、破壊のエネルギーをまき散らす。氷と炎が互いを殺しあつて、広い室内に凄まじい水蒸気が吹き荒れた。

大声を上げて、俺は叫ぶ。

「ジェラルド！ ウイルダネス！ そんなクズどもにどれだけ時間をかけてやがる、この無能どもがっ！」

「無茶を言うな、フェアライト！ これでも精一杯やっている！ それよりも扉はまだ開かないのか！？」

「も、もも、もう少しです、はい、ちよっ、と、待って！」

ジェラルドの怒号。

ディムの泣き言。

俺は、もう一度だけ舌打ちした。

ここは超高難易度ダンジョン《黄昏の死都》の地下八十九階。

このダンジョンの特徴は、よくある洞窟のようなタイプではないというところだ。周囲は白い大理石のようなもので構築されていて、壁や天井、床にまでも、緑色の光の線が縦横無尽に走っている。視界は十分すぎるほど明るい。神殿……そう、まさに見かけは神殿だな。正体は、古代都市の地下に建造された避難用のシェルター。それが造られてから何千年という月日を経て、魔物どもがうるつく巣窟と化してしまった。

このダンジョンには、たいした罠はない。……が、棲みついている魔物のレベルが高すぎる。リノティアが管理するダンジョンのなかでも、おそらくは最高に近いだろう。学園最強のパーティとして名

が通っている俺たちですら、ここにたどり着くまでに幾度となく肝を冷やし、死線をくぐり抜ける必要があった。もつとも弱いディムですらレベル三〇〇、リーダーの俺に至ってはレベル七〇〇を越えているというのに、だ。

俺の背後には、嚴重に封印された扉を開けようと、必死になってパネルを操作しパスワードを入力している、ディム・ウォーキスキンの姿がある。中等部二年生の、チビで臆病な、眼鏡をかけた茶髪のがキだ。

そして眼前、遠くのほうには、招かれざる侵入者である俺たちを殺そうと、爛々と双眸を光らせ殺意をみなぎらせている、数え切れなほどのグレーター・デーモンたちの姿があった。

グレーター・デーモンは、三メートル以上にも届く身長と、筋骨隆々とした黒色の肉体、真紅の瞳、長大な翼、そして頭部の左右からは捻じ曲がった角を生やしている、悪魔族のモンスターだ。極めて凶悪、強力で、人間なんぞ相手にもならないほどの膂力を持っているわ、強い魔法をバカス力撃ってくるわ、ほとんどの魔法はろくに通用しないわ、馬鹿みたいに体力は高いわ、おまけに同種の仲間をどンドン呼びやがるわと、出会っただけで今日の運勢は最悪だと確信できる魔物のひとつだ。それがすでに五十体以上もつようよと集結している。

広大な、ホールにも似た空間。

俺たちは完全に追い詰められていて、いわゆる手詰まりを迎えていた。

金髪オールバックの軽戦士、ジェラルド・ロウ・オツツダルヴァが叫ぶ。

「ユーフィーナ！ 加護をくれ！ なんとかしてでも奴らの動きをくい止める！」

「駄目よ、ジェラルドくん！ ひとりでなんとかできる数じゃあないわ！」

「俺もいるぜ、ユーフィーナッ！ 忘れてもらっちゃ困るぜえええ

っ！」

一体のグレーター・デーモンの首を大きな戦斧ではね飛ばし、スキンヘッドのごつい巨漢、ウィルダネス・ドストロイが野太い声を張り上げた。

白いローブを着た赤毛の神聖魔法使い、ユーフィーナ・ソグラテスは、まだぐだぐだと悩んでいるようだったが……くだらねえ。

「かまわねえからやつちまえ、ユーフィーナ。どうせできなきや俺たち全員ここで死ぬんだからよ」

「……その通りではあるな。私も援護しよう。全力の力を一瞬に注ぎ、奴らを押し返す」

ハイエルフの魔法使い、シエラザード・ウォーティンハイムが、冷静に、俺の意見に同意を示した。その手が握るのは高位の長魔杖《轟く豪魔》。

ジエラルド、ウィルダネス、シエラザード。三人の決意に気圧されたように、ユーフィーナはようやく覚悟を決めやがった。

「分かったわ。偉大なる我が主よ、この者らに御身の栄光を貸し与えたまえ」

長聖杖《慈悲深く抱擁する乙女》を高く掲げ、ユーフィーナが厳かに唱えれば、俺たち全員の瘦身に偉大な力が満ちた。ほんのいつときだが、パワーが倍増、魔力も底なしに強くなる。

その効果を肌で感じたのか、ウィルダネスが感激したように叫ぶ。

「お、お、おっ！ み、みなぎるるるあああああッ！」

身長三メートルにも達している巨人族の豪傑馬鹿は、斧を振り上げると、そのまま敵陣に突っ込んでいった。

どかんどかと爆発するような斧の一撃が連続する。

そしてそのおかげで混乱したグレーター・デーモンたちの足元を這うように、神速の素早さで、ジエラルドが走る。その両手にそれぞれ持った二本の剣が、魔物どもの足首を的確に切り裂き、奴らの体勢を崩していった。

「よし、ふたりとも下がれ、私が仕留める！」

大翼の光輪よ、

来たれ！」

シエラザードの詠唱。

エルフ女の頭上に、大きな光の輪が出現する。

さすがにでかい魔法を使いやがる。 ならば、俺も気張るとするか。

《狂える魔導士の背骨》を起動。

精神を集中して、呪文をつむぐ。

「偉大なる空虚なる者、黄昏の果てにて待つ者よ。我は汝の力を借り受けたく願う者。汝の望む破滅を望む者。汝、私の願いに応えるのであれば、その力をここに示せ」

「光輝よ！ 煌めき乱舞し、邪悪なる者どもに最期の安らぎを！」

「我が手に集うは焦熱の魔風。対象 目の前のクズどもだッ！ ぶちかませッッ！」

はしたなくも雄叫びを上げてしまった俺の手元から破滅の風が、そしてエルフ女、シエラザードの頭上に浮いている光の輪の中心から極太の光線が、それぞれ同時に発生して、グレーター・デーモンの群れに襲いかかった。

触れるだけで全身が焼け焦げて死ぬ病魔の風が、悪魔の強靱な肉体をも蝕み、殺す。そして鋼鉄をも蒸発させる熱量を持った白色のビームが、奴らをまとめて情け容赦なく薙ぎ払う。

学園に所属する生徒のなかでも、こと攻撃に関する魔法の技量で言うなら、俺が一番、そしてシエラザードは二番手だ。忌々しいことに僅差だがな。

だが、そんな俺たちふたりの特大魔法を受けてもなお、グレーター・デーモンどもはその総数を半分ほどに減らしたただだった。生き残っている連中は、ますますその目に憎悪の炎を燃え滾らせて、こちらに向かって襲いかかってくる。

大魔法の巻き添えにならないようにと一時は非難していたジェルルドとウィルダナスが舞い戻って、前線を維持しているが……それもいつまでもつものか。

この場でのカギを握っているのは、やはり、デйм・ウォーキスキ
ン。学園最優秀の頭脳を持つという錬金術師。俺たちパーティーの命
運は、こいつがこの扉を開けられるかどうかにかかっているのだ。
俺でも、できないことはないのだけどな。だがそれだと戦闘要員が
ひとり減る。こと戦闘に関してデймは死ぬほど役立たずだ。なら
ば必然と、護衛は俺、開錠はデймということになってしまふ。
まったく、クソ忌々しい。

「デйм……！ てめえ、いつまでごそごそやってやがる……！」

「も、もうちょっと、もうちょっとです、ほ、ほんつ、と、」

「聞き飽きたぜ、その台詞は」

俺は腰に提げてあった鞘から剣を抜き放ち、デймの細くて頼りな
い首に突きつけた。

「あと三十秒だ。それで開けられなきゃ俺がてめえを殺す。いいな
？」

「ひ、は」

自分の首にちょっと刺さっている剣を目にして、デймは涙を流し
ながらカクカクとうなずいた。顔面の色はすでに蒼白。小便なんざ
とうの昔に漏らしちまっているチキン野郎。こんなクズに自分の命
運を預けなくちゃなんのかと思うと、情けなくてこっちまで泣き
たくなる。

さらに泣きたくなることに、パーティー一番の善人面した女が怒りや
がった。

「フェアライト！ なんのつもりなの！？ やめなさいっ！」

「うるせえぞ、ユーフィーナ。黙ってる。クズのケツを叩いただけ
じゃねえか」

「そんなこと絶対に許さないわよ……その剣を下ろしなさい！」

「てめえから死にたいのか？ いいから黙ってるよ。こんな土
壇場で偽善者根性を丸出しにしたっていいことないぜ、マジで」
ウインクしながら言ってる。

色を失った顔のユーフィーナは、まだなにか言いたそうに口をあけ

だが……残念だったな、それどころじゃなさそうだが、ぜつ！

俺はデイムの首から離れた剣で、グレーター・デーモンが振り下ろした長剣を受け止めた。

「がきいん、という、甲高い音。

俺の目と鼻の先で、火花が鮮やかな色彩を散らす。

やれやれ、念のために身体強化の呪文をありったけ使っておいてよかったぜ。なにしろ相手は筋肉の塊のような悪魔族だ。臂力だけでいうなら俺など相手にもならないだろうからな。

それでもじりじりと押されてしまうのは、まあ、仕方のないことだ。なにせ敵は両手を使っている。それに対してこっちは片手だ。仕方がない。

なぜ片手しか使わないのかって？

それはもちろん、こつやつて、握った杖から魔法を放つためさ。

「弾ける、我が憎悪」

短く告げる。

直後に発生した赤黒い爆発が、至近距離からグレーター・デーモンの頭部に炸裂した。避けようのない一撃だっただろう。まともにくらって、そいつは首から上をすっかりなくし、後ろに大きく吹っ飛ばようにして倒れた。

グレーター・デーモンのもっとも厄介な点は、無尽蔵に仲間を呼び寄せるところにこそある。一対一の戦いなら、こんなクズに負けるような俺ではない。

……さて。もうすぐ三十秒が経つぞ、デイム・ウォーキスキン。

と、俺が殺意を募らせたころだった。

「あ、開きました！」

歓声を上げたデイムの表情を見るまでもなく、巨大な扉が左右に開き、その向こうがわを見せつつある。

俺は思わず、にやりと笑った。

「でかした。おい、おまえら！ さっさと行くぞ、急げポケッ

！ このボンクラのドブネズミどもがっ！」

ちよつとでも遅れようものなら、ためらわず見捨てて扉を閉めてやる。

密かに決意した俺の想いとは裏腹に、全員がさっさとこっちに逃げてきた。まあそれが一番だがな。誰かが欠けるとここから先はきついだろう。そのくらいのは、俺だつて分かっている。

迫りくるグレーター・デーモンたちを、俺とシエラザードの魔法で蹴散らし、押し返し、足どめしながら、扉の向こうへと撤退する。俺に向かって、一体のグレーター・デーモンが魔法を放ったのは、そのときだった。

凶悪なまでに燃え盛りながらすつ飛んでくる、大きなファイアボール。

ちよつと魔法を使ったところで、俺は防御魔法を展開することすらできなかつた。剣で火の玉を防ぐことはできない。ならばどうすればいいのか。足が硬直していて、いまから横や上に跳んでも間に合いません。

俺はすぐ横にいたディムのわき腹に剣を突き刺して、その矮躯を盾のように前方へと差し出した。

「うっえっ？」

なにがどうなっているのか分からないとでも言うような、ディムの声。目の前から迫ってくる火の玉も、わき腹の灼熱とした痛みも、現実味を帯びていないのだろう。

だけど現実是非情で、容赦がないのだ。そしてどこまでも現実なのだ。

俺の身代わりとなってファイアボールをもらにくらったディム・ウオーキスキンは、一瞬にしてひどい悪臭を放つ黒焦げの死体となり

俺はそれを、すぐに剣を振って放り捨てた。

閉じていく扉の隙間へと腕をねじこもうとしていたグレーター・デーモンの顔面に、ディムの死体は鮮やかに衝突して、そのまま向こうがわに飛んでいって見えなくなった。

重々しく閉じた、扉。

あれだけ騒がしかったグレーター・デーモンどもの凶暴な怒声も、もう聞こえない。

俺は深くため息をつき、言った。

「やれやれ、えらい目にあっただぜ。気を取り直して先を急ごうか」

「……フェアラート。あなた、なにをしたの」

「あ？」

「ディムが　ディムが、うそよ、こんなの……!!」

ユーフィーナは、完全に閉じた扉を叩き、そこにすがりつくようにして、嗚咽を漏らしていた。まさか泣いてやがるのか？　あんなクズのために？　おいおいやめてくれよ、はっはっは、笑っちまうだるまったくよ。

その背中に、そっと優しく声をかけてやる。

「尊い犠牲だったな」

「なにを、そんなこと……!!　よくもあなたが言えたものね!」

きつ、と俺を睨みつける、赤毛女の蒼い瞳。

俺は薄ら笑いを浮かべてやった。

「俺だから言うのさ。この俺の身代わりになったんだ……これ以上はないっていうほど尊いぜ。クズにしては上出来の最期だった」

「フェアラート!」

激昂して、俺に掴みかかろうとする、ユーフィーナ。

そんな俺とユーフィーナのあいだに割って入ったのは、ジェラルドだった。

「どいて、ジェラルドくん!　もう我慢できないわ。もう、たくさんよ!　そんなやつのをいでディムは……あの子は優しくて素直な、いい子だったのに!」

つまりは、生きていく能力のないグズだったということだ。

優しい?　間抜けなことだろ。

素直?　無能だっことさ。

いい子?　……さっさと死んでおいてよかったね。この世は地獄だぜ。

このくそつたれの世のなかで、生きる権利を勝ち取れるのはな……
いつだって、非情で、根性の捻じ曲がった、悪い子なのさ。

俺の嘲笑を知ってか知らずか、ジェラルドは、ユーフィーナを抱きしめるようにして言った。

「分かってている。きみは、彼とは仲がよかったものな。……だが、ひどいことを言うようだが、そのことについてはあとで議論するべきだ。いまは、先に進もう」

「でも、でもっ！」

「勘違いしないでくれ、ユーフィーナ」

赤毛女を抱きしめたまま、俺のほうに振り返り、ジェラルドは静かに俺を視線で射抜いた。

「私としても、彼女の行為を見過ごそうとは思っていないさ」
ほう……？

ふと目をやってみれば、感情の動きの激しいウィルダネスだけでなく、普段からどこの誰が死のうとも眉ひとつすら動かさなかったシエラザードまでもが、俺を咎めるようにして睨んでいる。

……やれやれ、まったく、どいつもこいつも偽善者だねえ。反吐が出るよ。

他人が生きようが死のうが、そんなことはどうだっていいことだろう？

大事なのは、自分が幸せであるかどうかさ。

自分を大切にしようぜ、みんな。

そんなに俺に逆らって殺されたいのか……？

俺は肩をすくめて、言ってやった。

「話はまとまったか？ そろそろ行くぞ。意見やら苦情やらは学園に帰ったあとで受け付けるぜ」

そしてパーティのメンバーに背中を見せて歩き出す。

「そうそう。ひとり減っちまったから、新しいメンバーも見つけなくちゃな。ま、そっちは任せろ。マーキアスに活きのいいのを調達させるわ」

と言った直後、背後から向けられる怒気や殺気が高まったような気がした。

どうでもいいことではある。

俺は急いでいるのだ。クズどもの偽善に付き合っただる暇など、一秒もない。

自己紹介が遅れたな。

俺の名はフェアラート。

フェアラート・ウイケッド・セルフィッシュ。

純粹な人間族。

得意とするのは剣と魔法とその他のすべて。

クセのある短めの黒髪と、真っ赤な瞳、そしてすべてにおいてパーフェクトなプロポーションが特徴的な、リノティア学園に所属する十九歳の冒険者。最強の戦闘能力と究極の美貌をあわせ持つ、偉大なる女王。

これでもいちおう、女だぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646x/>

がんばればくらのノーカン先生！

2011年10月26日13時59分発行